

シェイクスピアの世界
(ハムレットⅢ)

ハムレットⅢ
(第一幕)

はじめに

さて、今回は、シェイクスピアの世界（ハムレットⅢ）の「第一幕」になるが、その内容は、次のようなものである。――まず、第一場では、深夜十二時に、歩哨の「フランシスコ」から「バーナード」へと夜警が交代になると共に、そのあとすぐに「マーセラス」とホレーシオの二人もやって来る。そして、衛兵のマーセラスという人は、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言つて、んで信じようとしなさい。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もようく見張つて、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たつて連れてきた」と言う。すると、ハムレットの親友（学友）でもある「ホレーシオ」という人は、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言うが、しかし、実際に、先王の「亡霊」が出現するに及んでは、それを認めざるを得ないとしても、一体、何のために出現するのかという「疑問」へと話題は移行していく。……そして、今夜、ここで見たことは、すべて「王子ハムレット」に知らせようということになるのである。

*

*

次に、第二場は、先王の「崩御」から約二月後の今日が「戴冠式」の帰りとあり、そして、今、会議の大広間で、「戴冠式」後の新「国王」としての最初の「挨拶」をしているところである。とにかく、「葬儀」から「婚儀」へは、余りに慌ただしく行なわれたとあり、特に、先王の「崩御」からわずかの間に、先王の王妃（母親）は、ハムレットに言わせれば、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いがあると思つていた「叔父」（クロウディアス）と結婚してしまつたと孤独悩み苦しむのである。また、国外では、ノルウェーの若輩の「フオーティンブラス」という人は、父が失つた「領土」を腕ずくで奪還しようとしている。そこで国王の「親書」を携えた二人の使者を、老いた「ノルウェー王」のところへと派遣することになる。また、内大臣（ポローニアス）の「息子」（レアティーズ）という人は、「……フランスへもどらして頂きたい」と願ひ出て、それが国王に快く受け入れられる。最後は、ハムレットであるが、国王は、「……なぜ、そなたの顔に相変らず曇がかかっているのか？」と聞く。そして、国王は、「……父親が先立つのは普通のこと、お前も無益な悲しみを投げ捨てて、わしをほんとうの父と思つてくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、ウィッテンベルクへ再び留学したいという志は、どうか思い留まつてほしい、妃（母親）も「そう願ひますよ」と言うので、ハムレットは、「……はいはい、母上のおおせに従ひます」と応え、国王も王妃も、その言葉を聞いて、晴れやかに退場して行く。……その後、先王の「亡霊」を見た、三人、特にハムレットの親友（学友）の「ホレーシオ」という人は、「……殿下、じつは昨夜（深夜一時に）、夜警中、あの城壁の上で『先王の亡霊』を見たのです」と正直に告げると、ハムレットは、大いに関心を示して、「……今夜はぼくも夜警に立とう。もしかしたら、また現れるかも知れない」と言うと、ホレーシオは、「……必ず出るに相違ありません」と応えるのであつた。

*

*

次は、第三場であるが、内大臣（ポローニアス）の息子（レアティーズ）の登場であり、彼は、留学先のフランスへと戻ることになり、「……もう手廻りの品々は積込んだ。じゃ、

さよなら……」と言い、「……それからハムレットがお前にいい加減なお愛想をいっていいようだが、ありや血の気の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思つたらよい。それ以上のものではないよ。……しかも、生れが生れ故に、自分勝手に切盛りの出来ない方なのだ。うっかりあの人の恋の歌に耳を貸し、愛を捧げたり、大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オプリーリア、恐ろしいことだよ。世間の悪口の毒矢からは逃れられないもの。だから警戒するがよい。万全の策は用心にある」と言うのであった。そこに父親（ポローニアス）が登場して、今度は、息子（レアティーズ）へのまさに「餞別の言葉」になるが、そのあと、ポローニアスは、「……王子が近頃よく、お前の所へお忍びで、お前の方も、えろう気前よくお迎えして、お相手になつていそうだな。（中略）、しかし、これからは、処女の身として出しゃばらず、少しつつましやかにするがよい。……今後は、みだりに、ちよつとでも、ハムレット王子に言葉をかけたり、語ろうては相成らぬぞよ。よいか、きつと申渡して置くぞよ」と言うのと、オプリーリアは、「……おとう様の仰せ通りに致します」と言うのであった。

* *
さて、第四場は、城の「城壁」の上、ホレーシオとマーセラスそれにハムレットの三人は、寒々とした「深夜十二時」に、一方の小塔から登場する。そして、深夜十二時を過ぎたので、そろそろ亡霊が例によつて出歩く頃だと話し合つていると、そこに突然、まさに先王の「亡霊」が現われるのであった。そこで、ハムレットは、「……さて、なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！ 天の靈気か、地獄の毒気か？ 目的が悪意であれ親切であれ、物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにも問うて見る。……さあ答えよ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破つて出たのか？ 何故あつて、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？ しかばねとなつたなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、このような深夜に、どういうわけだ？ その理由を言え！ われわれはどうしたらよいのか？」と問う。すると、先王の「亡霊」は、無言で、ハムレットに向かつて「手招き」をする。連れの「二人」は、「危険だから」と強く反対するが、ハムレットは、それを振り切つてまで、その先王の「亡霊」について行くのであった。

* *
さて、第五場は、いよいよ先王の「亡霊」が、その恐るべき「死の真相」を自ら語るという、まさに一つの「クライマックス」場面であるが、それは、まず、先王の「亡霊」は、ハムレットを「城の外」の誰も居ない「空き地」へと連れ込めると、ハムレットは、「……おい、どこへ連れて行くつもりか？ もうこれ以上、ついて行かないぞ」と言うのと、亡霊は、「……（振り返つて）よく聞け」と言う。ハムレットは、「……うむ、聞こう」と答えると、亡霊は、「……われこそはなんじの父の靈なるぞ。（中略）、わしは庭で昼寝の際、へびにかみ殺されたと発表され、デンマークの国民の耳も、このような虚言ですつかりだまされているが、じつは、お前の父をかみ殺したへびは、現に今、父の王冠を頂いているのだぞ」と言う。ハムレットは、「……やっはり、虫の知らせが当たっていたか！ 叔父めが！」と言う。亡霊は、「……そうだ。あの畜生にも劣つた不倫の不義の男が、奸智と叛逆の腕を振つて、わしの貞淑に見えた妃の心を、奴の恥ずべき欲望へと折れさせてし

まった」のだと言う。しかし、もう夜明も近い、手短かに話そう「……わしは午後のいつもの習いで、庭で寝ていた。その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、らい病のように肉を腐らすその液体をわしの耳の孔へ注ぎ込んだのだ。そして忽ちわしの滑かな膚はらい病のように全身かさぶたにおおわれてしまった。そのようにして、わしは仮寝の間に、弟の手にかかって『生命も王冠も王妃』も一時に奪い去られてしまったのだ」と言う。だから、ハムレットよ、この「わしのことを忘れるな」(Remember me)‘そして、必ず、わたしの「敵討ち」(つまり「復讐」)を果たして欲しいと語るのであった。

平成三十一年三月吉日 (改訂版)

如月翔悟

目次

ハムレット III

はじめに

第一幕

- 第一場……エルシノア城の城壁の上
- 第二場……城内会議の大広間
- 第三場……ポローニウス邸の一室
- 第四場……城の城壁の上
- 第五場……城壁の下の空地

第二幕

- 第一場……ポローニウス邸の一室
- 第二場……城内拝謁の間

第三幕

- 第一場……拝謁の間の廊下
- 第二場……城内の広間
- 第三場……拝謁の間の外^{ぞと}
- 第四場……王妃の居間

第四幕

- 第一場……王妃の居間（しばし後のこと）
- 第二場……城内の別の一室
- 第三場……城内の別の一室
- 第四場……デンマークのある港に近き平野
- 第五場……前の時より数週間を経過す
- 第六場……城内の別の一室
- 第七場……城内の別の一室

第五幕

- 第一場……墓場
- 第二場……城内大広間

※
参考文献

ハムレットⅢ
(第一幕)

さて、今回の「シェイクスピアの世界」（ハムレットⅢ）という作品は、今までの「ハムレットⅠ」と「ハムレットⅡ」のいわば続編であるとともに、今までは『ハムレット』全体の中のある部分を抜き出し考察した「内容説明」であり、それゆえ、いわゆる「ハムレット」全体の「内容」が一体どのようなになっているのかは、あまり記述されていない不十分なものであり、それゆえ、今回は、いわゆる「ハムレット」の全体像（その最初から最後まで）の「本文」を丁寧に読み辿りながら、その「本文」の内容を順に読み解いてみたいと思う次第であり、それは、まず、次のような「冒頭」から始まるものである。

第一幕

第一場 エルシノア城の城壁の上

深夜、城壁の上、歩哨の「フランシスコ」は、大身槍を携えてあちこちと歩いている。そこにもう一人、交代のために同じように身を固めた衛兵の「バーナード」がやって来る。彼は暗がりの中に歩哨の「フランシスコ」の足音を聞いて、はっと驚く。……

*

*

まず、「冒頭」の場面、はっと驚いた衛兵（バーナード）が、「誰だ？」と叫ぶと、歩哨（フランシスコ）も、「……お前こそ誰だ！ 止まれ、名乗れ」と叫び合う。衛兵（バーナード）は、「国王万歳！」と叫ぶと、歩哨（フランシスコ）は、「バーナードか？」と聞く。「そうだ」と応えると、「……きつちり時間通りに来てくれたな」と言う。すると、「……今十二時が鳴ったばかり。フランシスコ、お休み」と言う。「……この交代はかたじけない。身にしみる寒さで、気がめいってくる」と言う。「……見張り中は別状なかったか？」と聞く。「……ねずみ一匹でなかった」と応える。「……では、お休み、わしの見張りの相棒のホレーシオとマーセラスに出会ったら、急いでやって来るように言ってくれ給え」と言うのであった。（本文）

この場面は、深夜十二時の「見張り」交代の通常場面ではあるが、通常ではないのは、すぐに「マーセラスとホレーシオ」の二人が新たに登場することである。

——ホレーシオとマーセラスがやってくる。——

歩哨（フランシスコ）は、「……やって来た気配がする。おい、止まれ、誰だ？」と叫ぶと、ハムレットの親友でもある「ホレーシオ」は、「この国の味方の者」と叫び、もう一人の衛兵（マーセラス）も、「デンマーク王に忠節を誓った者」と叫ぶ。すると、歩哨の「フランシスコ」は、「……では諸君、ご無事で」と告げ、衛兵（マーセラス）は、「……では、さようなら。誰が君と交代したのか？」と聞くので、歩哨の「フランシスコ」は、「……バーナードが変わってくれた。では諸君、ご無事に」と告げて、退場する。（本文）

*

*

さて、ここからは「三人」（バーナードとマーセラスそれにホレーシオ）の三人の「会話」になっていくが、それは、次のようなものである。——まず、マーセラスが、「おい、バーナード！」と言うと、バーナードは、「……おお、ホレーシオも一緒か？」と聞くので、ホレーシオは、「まあ、そうだな……」と言い、バーナードは、「……ホレーシオ、よろこそ。マーセラスもよろこそ」と挨拶し合ったあと、衛兵（マーセラス）は、「……して、例の物は今夜も現われたか？」と聞くので、同じ衛兵の「バーナード」は、「……まだ何も見ていない」と告げる。すると、マーセラスは、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言って、てんで信じようとしな。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もよく見張して、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たつて連れてきた」と言う。すると、ハムレットの親友でもある「ホレーシオ」は、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と応じる。一方、衛兵の「バーナード」は、「……まあ、しばらく腰を下ろしましょうや。そうして、ぼくらが二晩続けて見たものを、とくと説明して、要害堅固に僕らの話を聞こうとしない君の耳を、もう一度攻撃しましょう……」と言う。ホレーシオも、「……じゃ、腰でも下ろして、バーナードの話を聞こうかな」となり、すると、バーナードが、「……つい昨夜のこと、北斗星の西に見える、ほら、あの星が、ちょうど今輝いているあの天の一角に来た時だった。マーセラスとぼくとは、丁度鐘が一時を打ち鳴らすその途端に——」と言いかけると、そこに、まさに「亡霊」が現われるのであった。

——亡霊現る。頭から足の先まで甲冑で身を固め、大元帥の指揮杖を携う——

まず、マーセラスが、「……しつ、黙って、見給え、あそこへまた出て来た！」と言うと、バーナードは、「……崩御された王様そっくりのお姿で」と言い、マーセラスは、「……ホレーシオ、君は学者だから、あれに話かけてみなさい」と言う。バーナードも、「……なんと王様そっくりでしょう。よく見て下さい」と言う。ホレーシオは、「……確かに、よく似ている。恐ろしさと思議さで、ぼくの心はかき乱れて来る」と言う。バーナードは、「……何か言つて貰いたがつている」と言う。マーセラスも、「……ホレーシオ、何か言つてやつて下さい」と言う。そこで、ホレーシオは、「……なんじ何者なるか、恐れ多くも、亡きデンマーク王陛下が、かつて戦に出でました際の、凛々しいおんいで立ちを装うて、かような深夜に出没するとは、天に代わってなんじに命じる、ものを言え」と叫ぶ。すると、マーセラスは、「……不機嫌そうな顔になった」と言い、バーナードは、「……あれ！ 行つてしまふ」と言う。ホレーシオは、「……待て！ 口をきけ、ものを言え。命令だ！」と叫ぶが、先王の「亡霊」は、何も言わず退場してしまう。（本文）

*

*

さて、ここまでの四人の「登場人物」について考えてみたいと思うが、まず最初は、歩哨の「フランシスコ」であるが、この「人物」も、まさに「衛兵」であり、そして、その「衛兵」というのは、ある場所に（武装して）立ち、敵などを見張る兵士のことであり、今、まさに夜中の十二時まで一人で「見張り」をする任務を遂行していたのである。そこに深夜十二時以降の「見張り」の交代要員として同じように武装で身を固めた「バーナード」

がやって来るのである。この「バーナード」という人も、「衛兵」という設定になっているので、歩哨の「フランシスコ」とも、身分的には同じことになるかと思うが、そして、すぐにも「マーセラス」と「ホレーシオ」の二人も登場することになるのである。

さて、ここで考慮すべきことは、まず、なぜ「三人」は、一緒にやって来なかったのかという問題であるが、それは、次のようなことである。——つまり、深夜十二時以降の「見張り」の交代要員として、「バーナード」という人物は、その任務を誠実に遂行するためにも、その「時間」をまず厳守したということである。そして、「……わしの見張りの相棒のマーセラスとホレーシオに出会ったら、急いでやって来るように言ってくれ給え」と言っている。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、二人がすぐ来るのか、それとも、遅れて来るのか、それがよく分からない状況なのである。それは、「二人」（つまりバーナードとマーセラス）とが、二晩続けて見た「先王の亡霊」の話を「ホレーシオ」という人にいくらか話をして、それを全く信じようとしないのである。つまり、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言っていて、んで信じようとしな。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もようく見張して、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たつて連れてきた」と言うと、ホレーシオという人は、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言うのである。つまり、ホレーシオは、この話を全く信じてはおらず、それゆえ、マーセラスの「誘い」（深夜一緒に亡霊を見ること）にも全く興味が持てないところを、マーセラスという人は、「先王の亡霊」をホレーシオに何が何でも見せようとして、わざわざ無理にでも連れて来ているのである。……

そして、「ホレーシオ」という人物を連れて来る、もう一つの理由は、「……亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たつて連れてきた」と言うのである。つまり、「……一つは、亡霊が出たことを認めてもらうために、そして、もう一つは、その亡霊に話しかけてもらうため」にこそ、わざわざ連れて来ているのである。それでは、なぜ「ホレーシオ」なのか？ それは、次のようなことである。——まず、ホレーシオという人物は、ハムレットの親友であり、また、学友でもあるが、主人公のハムレットというのは、ドイツの「ヴィッテンベルグの大学」に留学していて、今は、先王（父親）の突然の「崩御」のために、急遽、デンマークへ戻っているのであるが、その大学の学友でもある「ホレーシオ」が、まさに先王の「葬儀」などを拝観するために、わざわざデンマークへと来ているのである。しかも、その「大学」というのは、いわば「神学校」であり、それゆえ、ハムレットの学友でもある「ホレーシオ」という人物は、大学で「神学や哲学」などを本格的に学んでいる人物にもなるのである。

ところで、衛兵（軍人）の「二人」（バーナードとマーセラス）という人たちは、先王の「亡霊」に対して、たった一言も「話しかけよう」としていない。そして、先王の「亡霊」に「話しかける」のは、すべて「ホレーシオ」に任されている。むしろ、そのために「連れて来た」のである。——つまり、衛兵（軍人）である「マーセラス」という人は、「……ホレーシオ、君は学者だから、あれに話かけてみなさい」と言っている。この「学者」というのは、つまり、「ホレーシオ」という人物は、大学で「神学や哲学」などを専門的に学び研究している人であり、当時、亡霊は他人から話しかけられないと、自分からは話し出すことは出来ないと思われていて、しかも、ラテン語の一種の呪文によつての

みその祟りを祓うことが出来ると考えられていたらしく、それゆえ、「ラテン語」を知っている「ホレーシオ」をたつて連れて来ているのである。だからこそ、先王の「亡霊」に「話しかける」のは、すべて「ホレーシオ」に任されているのである。そして、「ホレーシオ」は、実際に、「……なんじ何者なるか、恐れ多くも、亡きデンマーク王陛下が、かつて戦に出でました際の、凛々しいおんいで立ちを装うて、かような深夜に没出すると、天に代わってなんじに命じる、ものを言え」と叫ぶと、先王の「亡霊」は、なぜか「不機嫌そうな顔になった」とある。これは、非常に面白いところであり、その「理由」は、先王の「亡霊」がせひとも話をしたい相手は、「ホレーシオ」などではなく、まさに「ハムレット」ただ一人だけに話がしたいのである。だからこそ、「ホレーシオ」が何を言おうとも、先王の「亡霊」は、何も言わずにさっさと退場して消えてしまうのである。――亡霊の退場――

すると、衛兵のマーセラスは、「……行ってしまった。答えようとしな」と言う。バーナードは、「……ホレーシオ！　どうかしましたか？　あなたは青くなってふるえていますよ。どうです、これは錯覚以上のものじゃないですか？　どうお考えですか？」と聞くので、ホレーシオは、「……僕のこの目がまのあたりに、今、確かに見なけりや、ぼくはこんなものを神にかけて信じられない」と言うのであった。すると、マーセラスも、「……王様そっくりでしようがな」と言う。ホレーシオは、「……君が君自身に似ているように、王様が野心家のノルウェー王と一騎打の勝負をされた時、身にまとわれた甲冑が、丁度今のようにであった。さつき顔をしかめられた様子も、丁度かつて談判破裂の挙句、氷の張りつめた上で、そりに乗ったポーランド軍を打ちのめされた時とそっくりだった。不思議なことがあるものだ」と、先王の「亡霊」の出現をどうにも認めざるを得ないとしても、それでは、一体、何のために出現するのかという「疑問」へと移行していくのである。そして、マーセラスは、「……前二度ともこの通り、丁度夜が死んだように更ける今十分にになると、ぼくらの見張っているそばを、いかめしい歩調で通られたのである」と言う。と、ホレーシオは、「……どういふ風に考えていいか知らないが、僕の大体の見当では、この国にとつて何か不吉なことが勃発する前兆だ」と言うのであった。マーセラスは、「……どうです。腰をおろしましょうよ。そして、分っている人は話して下さい。一体、なんの為にこの国の人たちは、かような敵重極まる夜警で毎晩苦しむのか、またなんの為に、毎日あのように真鍮を鑄て大砲を作ったり、武器を外国から買入れるのか、なんの為に舟大工をあんなに駆り集めて、日曜日にも労働日も働かせるのか、あのような汗水流してあわただしく、夜昼かせぎ通すなんて、一体、何事が始まるのだろうか？　だれか教えてくれる人がいますか？」と聞く。(本文)

* *
これは、まさに、今、デンマークが置かれている政治的・軍事的「情況」がどのようなものであるかを、この芝居を観ている観客たちにいわば説明しているのであり、それに対して、ハムレットの親友(ホレーシオ)が、次のように詳しく答えるのである。

つまり、「……ぼくが教えてあげよう。少くも、世間のうわさはこうである。たった今生写しが現れた先君は、御存じの通り、虚栄的な競争心に駆られたノルウェーのフオーテ

インブラスにいどまれ、一騎打ちの勝負をなすった。その果し合いで、剛勇な御気象と世間のうわさの高かったハムレット王は、このフォーティンブラスを見事打ち果たされた。そしてこの者は、騎士道のおきてに照らして誓もし調印もした契約書によって、生命とともに彼の所有した領土をことごとく、征服者へ喪失してしまった。その契約に対しては、こちらの王様も十分なものを賭けられた。それはフォーティンブラスが勝利者とさえなつたなら、彼の手に落ちたであろうに。実際は、その契約書につづられた条文の趣意に従つて、彼のものがハムレット王の手に落ちたのだ。ところが、君、息子の当主フォーティンブラスは、まだうぶな癖に血気にはやって、ノルウェーの国境のあちこちで、向こう見ずの無頼漢多ぜいを、何事か太っ腹な冒険を企て育てる為に、やたらに飲み込んでいるのです。それはほかでもない。父親があのように失った土地を腕づくで無理無体に奪回しようというので、それはこちらにはよく見えすいてのことです。われわれの軍備の主な動機も、この夜警の原因も、早馬を駆るような、あわただしい国内の騒ぎの元も、みんなこれだとぼくは思う」と言う。(本文)

*

*

さて、その本文を「要約」すると、それは、かつて「先王」(ハムレット王、ハムレットの父親)は、虚栄的な競争心に駆られたノルウェー王のフォーティンブラスに挑まれて、まさに「一騎打ち」の勝負をしたが、その「勝負」に勝つて、(契約書通り)、ノルウェー王の「生命」とその「領地」を手に入れることになった。ところが、息子の当主フォーティンブラス(父親と同じ名前の息子)は、まだうぶな癖に血気にはやって、ノルウェーの国境のあちこちで、向こう見ずの無頼漢多ぜいを集めて、父親があのように失ったその「土地」を腕づくで無理やりにも奪回しようとしているので、それに備えて、今、デンマークでは、まさに「軍備増強」を行なっている最中になるのである。

すると、バーナードも、「……ぼくも多分それに違いないと思う。この不吉な亡霊が、昔も今もこういう戦争の原因となっている。あの王様そっくりの甲冑姿で、見張のわきを通るといことが、無事に納まればよいが……」と言う。——つまり、昔も今もこういう戦争の原因を生み出しているのは国王であり、その国王(先王)そっくりの「亡霊」が甲冑姿で現われるということ自体、ただごとではなく、何か不吉な「前ぶれ」であり、それゆえ、何も起こらず無事で納まればよいがとなるのである。……

すると、ホレーシオも、「……確かに、塵一つ入っても心の眼を悩ますものだ。栄華を極めたローマでも、あの偉大なジュリアス・シーザーが倒れた前夜は、墓という墓は空となり、墓衣を纏った死人たちは、ローマの町をただならぬ金切り声をあげ、わけの分からぬことをわめいてさまよったものだ。……星は火のしっぽを引き、血の露を降らし、太陽はむしばまれ、また、その引力で大海原の領土を支配する月も、この世の終わりが来たとかかり真暗になってしまった。それと同じように、この国の人々に対し、恐ろしい事件が相次いで起こる前兆、つねに運命に一步先んじて来る前ぶれ、やがて来たるべき凶事の序曲として、まさに天地きそつての天変地異が起っているのではないか」と言う。(本文)

*

*

つまり、何か「大事件」が起こるような前には、何か「亡霊」が現われたり、また、天地がきそつてその国の人々に「前ぶれ」を示すのであり、例えば、あの偉大なジュリアス

・シーザーが倒れた前夜も、墓という墓は空となり、墓衣を纏った死人（亡霊）たちは、ローマの町をただならぬ金切り声をあげ、わけの分からぬことをわめいてさまよったものだ。また、星は火のしっぽを引き、血の露を降らし、太陽はむしばまれ、また、引力で大海原を支配する月も、この世の終わりが来たとはかり真暗になってしまった。そのように何か不吉なことが起る「前兆」（前ぶれ）として、天地がきそってその国の人々に前もって知らせるのである。それと全く同じように、今回の先王の「亡霊」の出現も、まさに何か不吉なことが起る「前兆」（前ぶれ）と、ハムレットの親友（ホレーシオ）は、そのように考えているのである。すると、「……おや！ 静かに。見給え、あそこへまた出て来た」と言うのである。——亡霊再び現る。

すると、ホレーシオは、「……たたりでこの身がどうなろうと、あれの来る道に立ちふさがってやろう。（両腕をひろげる）。これ、待て、まぼろし、なんじもし音声を出し、ものが言えるなら、わしにものを言え。何かなんじの功德になり、わしも幸福になれるような良いことが出来るなら、さあ言え。なんじもしこの国の運命の秘密に通じ、それが前もって知ることによって避けられるものなら、さあ言ってくれ。それとも、なんじが生前に横領した財貨を大地のお腹にうずめ匿したことがあるなら、そのことを言え。なんじら亡者はそういうものに未練があつて、死後も折々迷うて出歩くという話だ。（鶏が鳴く）、うせるな、ものを言え。マーセラス、とめてくれ給え」と言う。（本文）

さて、ここは「神学や哲学」などを専門に学んでいる「ホレーシオ」ならではの「話しかけ」であり、衛兵（軍人）の「バーナードやマーセラス」などでは恐らくできないような「質問」を問いかけているのである。——まず、なんじもし音声を出し、ものが言えるなら、わしにものを言え。と呼びかけて、一つは、何かなんじの功德（良いこと）になり、わしも幸福になれるような良いことが出来るなら、さあ言え。次に、なんじもしこの国の運命の秘密に通じ、それを前もって知ることによって避けられるものなら、さあ言ってくれ。そして、もう一つは、それとも、なんじが生前に横領した財貨を大地のお腹にうずめ匿したことがあるなら、そのことを言え。となる。この「問い」かけは、恐らく、「神学」で「亡霊」が出る時には大体こういう「理由」が多いので、それを「問い」かけているのではないかと思う。もちろん、最後の「……生前に横領した財貨を大地のお腹にうずめ匿したことがあるなら、そのことを言え」というのは、「……なんじら亡者はそういうものに未練があつて、死後も折々迷うて出歩くという話だ」ということからである。もちろん、先王の「亡霊」にしてみれば、見当外れもはなはだしく、また、夜明けも近いということ、先王の「亡霊」は、何も言わずに再び退場しようとしているのである。

すると、マーセラスは、「……この大身槍で打ってやろうか？」と言い、ホレーシオは、「……立ちどまらなけりや、打って見給え」と言う。バーナードは、「や、ここへ来た！」、ホレーシオも、「や、ここへ来た！」と言い、マーセラスは、「……行つてしまった！」と言う。（亡霊消える）。あのように王者の威厳を備えたものに、手荒な真似をするのは、われわれの方が悪い。あれは空気のように、刃が立たぬ不死身のもの。打ってかかっても甲斐はなく、やっても真似事に過ぎぬ」と言うと、バーナードは、「……あれがものを言

おうとした途端に雄鶏が時を告げたのだ」と言う。ホレーシオも、「……そして、その時、怖ろしい呼出状を受けた罪人のように、はっと飛び上った。雄鶏という夜明けを知らせるらつば手が、あのかん高い音色を出して、日の神の眼を覚ますと、海のなか。火のなか、地上、空中を問わず、迷い出てうろつく魔物はあわてて自分の領分へ逃げかかれると聞いたが、今の奴がこの話のまことを証明してくれたわけだ」と言う。

すると、マーセラスも、「……あれは雄鶏が鳴くと直ぐ消え失せた。救世主の降誕が祝われる季節に近づくと、夜明の鳥は夜もすがら唱って、魔物も出て来ないということだ。その頃の夜は出歩いても安全で、星も人にたたらないし、妖精もとりつかない。魔女も魔力を失う。その季節はそれほど清められ祝福されているのだ」と言う。すると、ホレーシオは、「……ぼくもそういう話を聞いているし、話半分には信じてる。だが、ちよつと見給え。茜色の衣を纏うたあけぼのが、向うの東の小高い丘の露の上を歩いている。さあ、われわれの夜警も解散しよう。そうして今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじやありませんか？　ぼくのいのちにかけて言うが、あの亡霊はぼくらにこそ口をきかないけれども、王子にはものをいいますよ。では、諸君、王子に知らせることは、ぼくらの友情から必要であり、また義務でもあるとして、ご賛成でしょうか」と言うと、マーセラスは、「……是非そうしたいものです。丁度ぼくは、けさ、ごく都合よく王子に会える場所を知っています」と言うのであった。(本文)

*

*

それでは、今までの第一場の「全体の内容」を簡単に振り返ってみたいと思うが、まず、深夜十二時に、夜警の交代があり、歩哨の「フランシスコ」から「バーナード」へと夜警が交代になると共に、そのあとすぐに「マーセラスとホレーシオ」の二人もやって来る。そして、マーセラスは、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言って、てんで信じようとしな。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もよく見張して、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たつて連れてきた」と言うと、ハムレットの親友(学友)でもあるホレーシオは、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言うのであった。ところが、実際に、先王の「亡霊」が出現するに及んでは、それをどうにも認めざるを得ないとしても、それでは、一体、何のために出現するのかという「疑問」へと話題は移行していく。そして、ホレーシオが、先王の「亡霊」にいくらどのような話しかけても、先王の「亡霊」は、一言も全く言葉を発しようとしな。

ところが、夜明けも近くなった頃、「……あれがものを言おうとした途端に雄鶏が時を告げた。すると、その時、……怖ろしい呼出状を受けた罪人のように、はっと飛び上った。雄鶏という夜明けを知らせるらつば手が、あのかん高い音色を出して、日の神の眼を覚ますと、海のなか、火のなか、地上、空中を問わず、迷い出てうろつく魔物はあわてて自分の領分へ逃げかかれると聞いたが、今の奴がこの話のまことを証明してくれた」と言う。

——例えば、有名な「ドラキュラ」なども「日光」を嫌って逃げ隠れるのである。そして、夜が明けると共に夜警を解散して、「……今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじやありませんか？　ぼくのいのちにかけて言うが、あの亡霊はぼくらにこそ口をきかないけれども、王子にはものをいいますよ」という展開になっていくのである。

さて、今までは「亡霊」の出現などなかったのに、なぜ、こゝに「三夜」続けて先王の「亡

「霊」が出現するようになったのか？ それは、先王の「実の弟」（クローディアス）と先王の王妃（ガートルード）との、まさに「戴冠式」があるからである。というのも、この「戴冠式」の裏には、実に恐るべき「事実」が隠されているのであり、その「事実」を王子（ハムレット）だけに知らせるためにこそ、先王の「亡霊」は、まさに「三夜」連続で出没しているのである。そして、夜明け近く、「……あれがものを言おうとした」とあるが、それは、恐らく、王子（ハムレット）をここに連れて来るようにということであり、それを察知したかのように、ハムレットの親友（学友）でもあるホレーシオは、「……今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじゃありませんか？ ぼくのいのちにかけて言うが、あの亡霊はぼくらにこそ口をきかないけれども、王子にはものをいいますよ」となっていくのである。

*

＊（第一幕第一場・終了）

第二場 城内会議の大広間

第二場 城内会議の大広間

さて、ラツパの吹奏のうちには、国王クローディアス、妃ガートルード、大臣ら、ならび内大臣（ポローニウス）とその息子のレアティーズ、また、ノルウェーへの特使ヴォルティマンドとコーネリアス。一同盛装して、戴冠式の帰りといういでたちで、最後に喪服姿の王子ハムレット、伏目勝ちにて登場。王および妃、王座の踏み台を上がる。

まず、国王は、「……兄君崩御の記憶はまだなまなましく、みながこころを悲しみにゆだね、全国民が一つに眉をひそめて嘆くのは誠にもつともなこと。だがわしは分別をもつて自然の情と闘い、王をしのんで悲しむとともに、おのれの本文を忘れまいと務めてきた。それゆえに、わしは、かつての姉を妃とし、この武勇の国の王位をわかち合うことにした。それは傷ついた喜びであった。言わば喜びと悲しみを等分に量って、片目はほほえみ片目は泣きながら、葬儀は歓喜の調べを、結婚は挽歌を奏しながらすませたようなものだった。またこのたびの婚儀とても、そちたちの分別ある知恵を斥けて挙げたわけではなく、みなが終始この問題には無条件に賛成してくれた。それに対しては、深く感謝しませぬ。次にみなも知る通り、若輩のフォーティンブラスは余の実力を侮ってか、それとも兄君の崩御でこの国が分裂混乱しているとでも思うてか、この夢のような勝味を空頼みして、案の定、使いをうるさくよこし、彼の父が契約に従って余の勇敢無比の兄君にとられて失った領土を明け渡せと催促しおる。だがその件はそれだけにして、次は余自身の問題と、かように集まって貰った当面の問題に移ろう。即ち、かの若輩フォーティンブラスの叔父に当たるノルウェー王は近頃老衰して床に就いたままで、甥のこの企てを一向に知らず、しかも自分の国民の中から大軍の動員が行われているのであるから、この書面には、甥のこの行動を取り抑えるよう、認めて置いた。それで、この親書をノルウェー王へ持参する使者として、コーネリアス、また、ヴォルティマンド、お前たち兩名を派遣することにする。しかし、先方の王と折衝するお前たちの権限は、ここに委細認めてある条文の範囲を超えてはならない。さあ、速やかに無事に使命を果して、功を立てるがよいぞ」と言う。すると、廷臣の「コーネリアスとヴォルティマント」は、「……何もかも仰せ通りに勤めを果します」と申し上げると、国王（クローディアス）は、「……いささかも疑いはしない。では、無事にな」と告げ、ヴォルティマントとコーネリアスの二人は退場する。（本文）

*

*

さて、国王（クローディアス）の冒頭の「挨拶」であるが、それは、堂々として実に見事であり、先王の突然の「崩御」により、全国民が深い悲しみにうち沈むのはもつともではあるが、一方、「……わしは分別をもつて自然の情と闘い、王をしのんで悲しむとともに、一方、おのれの本文を忘れまいと務めてきた」とある。——まず、ここで考慮すべきことは、それは、「葬儀」と「婚儀」と「戴冠式」のこの「三つ」の関係であり、先王の突然の「崩御」により、最初は、当然、「葬儀」が厳粛の内に行なわれたかと思うが、それがいつかは判然としないが「約二月」ぐらい前。そして、先王の「崩御」から約二月ぐらい後の今日が「戴冠式」の帰りとなるかと思う。そして、今、会議の大広間で「戴冠式」後の新「国王」としての最初の「挨拶」をしている場面である。その場合、「葬儀」と「婚儀」

と「戴冠式」のこの「三つ」は、一体、どのような関係になるのかと問えば、とにかく、「葬儀」から「婚儀」へは、余りに慌ただしく行なわれたとなっている。特に、先王の「崩御」からわずかの間に、先王の王妃（母親）という人は、ハムレットに言わせれば、（……一月もたない内に）、——アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いがあると思っていた「叔父」（クローディアス）と結婚してしまったのである。

一方、国王（クローディアス）は、先王の王妃（ガートルード）との「婚姻」については、「……一方では、王をしのんで悲しむとともに、一方では、自分の本文を忘れまいと務めてきた。それゆえに、わしは、かつての姉を妃とし、この武勇の国の王位をわかち合うことにした」とある。——これは、この国の主権を担う先王の王妃と「結婚する」ことによって、国家（権力）を自分一人だけで「独占する」のではなくて、この武勇の国の「王位」（権力）を二人で「わかち合う」ことにした、そのための「結婚」だと言いたいのである。——それは、「悲しみに沈んだ喜び」であり、「……喜びと悲しみを等分（五分五分）に量って、片目はほほえみ、片目は泣きながら、葬儀は歓喜の調べを、結婚は挽歌を奏しながらすませたようなものだった」とある。これは、「葬儀」の中にも「喜び」が入り交じり、また、「婚儀」の中にも「悲しみ」が入り交じった、まさに「……喜びと悲しみが五分五分に入り交じった複雑な感情」を以って、ことは行なわれたことになる。だとすれば、「葬儀」と「婚儀」（結婚式）とはほとんど同時かそれに近い感じで行なわれたことになる。しかも、その「婚儀」とても、「……そちたちの分別ある知恵を斥けて挙げたのではなく、みなが終始この問題には無条件に賛成してくれた」からだ、みなの前では婚禮の「正当性」をことさらに主張（強調）しているが、むろん、実際は、先王を密かに毒で「殺害」をして、まさに「王位とその生命と先王の妃」とを一気に略奪した「戴冠式」後の「挨拶」になっているのである。……

さて、次は、若輩の「フォーティンbras」のことであるが、彼は、「……余の実力を侮ってか、それとも兄君の崩御でこの国が分裂混乱しているとも思うてか、この夢のような勝味を空頼みして、案の定、使いをうるさくよこし、彼の父が契約に従って余の勇敢無比の兄君にとられて失った領土を明け渡せと催促しおる」とある。それに対して、国王（クローディアス）は、「……かの若輩フォーティンbrasの叔父に当たるノルウェー王は近頃老衰して床に就いたままで、甥のこの企てを一向に知らず、しかも自分の国民の中から大軍の動員が行われているのであるから、この書面には、甥のこの行動を取り抑えるよう、認めて置いた」とあり、その「親書」をノルウェー王へ持参する使者として、お前たち兩名（コーネリアスとヴォルティマンズ）を派遣し、「……速やかに無事に使命を果して、功を立てるがよいぞ」ということであり、これは、実に見事の対応であり、まさに「最善の策」を取ったということである。

次に、国王は、「……さて、次は、レアティーズ、何か変わったことでもあるのか？ 何か願い事があると言うたが、それはなんだ？ 道理のあることを王に申し出て、聞き入れられない事はないぞ。お前が所望するたいの事は、所望ではなくて、わしの方から進上したい程だが、それは一体何事なのだ？ デンマークの王座とお前の父上との関係は、頭と心よりもっと近しく、手が口の用を務める以上に密接な仲だ、一体何を所望するのだ？」と聞く。すると、レアティーズは、「……恐れながら、フランスへもどらして頂き

とうございます。私はこのたびの戴冠式たいかんに参列致しまする為に喜んでデンマークに帰国いたしました。が、やはり、じつは、この勤めを終わりますと、フランスがまた恋しく、思いをひかれますので、陛下へいかのお許しをひとえにお願いいたします」と言うのであった。

すると、国王は、「……父上の許しは出たのか？ ポローニアスはどう言った？」と聞くので、ポローニアスは、「……陛下、せがれめはさんざねだりおって、私の洩しやぶ々の許しを無理やりに取りましたのでございます。とうとうあれの強情かうじやうに折れて、いやいやながら賛成の判はんを押してやりました次第ゆえ、どうかお聞き届けに相成りますよう私からも願ひ申上げます」と言う。王は、「……ではレアティーズ、まあ愉快に遊んで来るがよい。時はお前のもの、気ままに使うがいいが、せいぜい立派に修業を積んで来なさい。それはそうと、わしの甥おひのハムレット、わしの息子は……」となつていくのである。(本文)

*

*

さて、今度は、内大臣ないだいじん(ポローニアス)の「息子」(レアティーズ)の問題であるが、彼は、父(ポローニアス)同様、国王(クロードディアス)からの信頼も非常に厚く、「……お前が所望するたいの事は、所望ではなくて、わしの方から進上したい程であるが、お前の願ひ事とは一体何なのだ？」と聞く。すると、内大臣ないだいじん(ポローニアス)の「息子」(レアティーズ)は、「……恐れながら、フランスへもどらして頂きとうございます。私はこのたびの戴冠式たいかんに参列致しまする為に喜んでデンマークに帰国いたしました。が、やはり、じつは、この勤めを終わりますと、フランスがまた恋しく、思いをひかれますので、陛下へいかのお許しをひとえにお願い申上げる次第でございます」と言うのである。

すると、国王は、「……父上の許しは出たのか？ ポローニアスはどう言った？」と聞くので、ポローニアスは、「……陛下、せがれめはさんざねだりおって、私の洩しやぶ々の許しを無理やりに取りましたのでございます。それゆえ、どうかお聞き届けに相成りますよう私からも願ひ申上げます」と言うので、国王は、「……ではレアティーズ、まあ愉快に遊んで来るがよい。時はお前のもの、気ままに使うがいいが、せいぜい立派に修業を積んで来なさい」と、快く送り出してくれるのである。……

一方、国王(クロードディアス)は、悩みのたねの一つ、「……わしの甥おひのハムレット、いやさ、わしの息子は……」と言うと、ハムレットは、「……(傍かたわらを向いて)親類以上だが、情愛は親類以下のくせに」と呟つぶやく。国王は、「……なぜ、そなたの顔に相変らず曇がかかっているのだ？」と聞く。ハムレットは、「……いや、陛下、ぼくは日向ひなたの青天井あおてんじやうに居過ぎますよ」と言う。すると、妃きは、「……ねえ、ハムレット、夜のような暗い曇りを払いのけて、もつと親しみの眼差しを国王にお向けなさい。土になられたおとうさまを、いつまでもそんな伏目勝ちふしめがに、恋しがるものじゃないことよ。人の常ではありませんか、生きてる者が一度は死ななければならぬことよ？ それは生身なまみの生涯しやうがいを経て永遠の世界はいに入るのですわ」と言う。ハムレットは、「……そりや、お母さん、世の常に違ひないですよ」と言う。妃きは、「……それなら、なぜあなただけが、それにむずかしくこだわつていなさるような風をしているのですか？」と聞く。ハムレットは、「……ような風？ お母さん、違う！ 僕わがのはほんものですよ。ような風なんて、ぼくには出来ない。この真黒な外がいとう、また世の習ならいのしかつめらしい喪服もくふく、わざとらしい吐息溜息といきためいき、眼から流れる涙の川、しよげた顔付、その他悲しみのあらゆる様式や姿をあつめたつて、そんなものだけ

では、ぼくのほんとうの気持をよく現してくれないんです。確かに、それらは『ような風』のもの、だれにでもやれる芝居でさ。悲しみの飾りや衣装に過ぎないものです。けれどぼくの心の中には、そんな眼に見えるものでは現わせないものがあるんです」と言う。

すると、国王は、「……ハムレット、おとうさんにそのような哀悼を捧げるのは、子たる者として、誠に美しい、立派な態度じゃ。けれど、よくわきまえねばならないことは、お前のおとうさんは、またそのおとうさんを亡くし、そのおとうさんも、また、御自分のおとうさんを亡くしておられる。そしてあとに残された者はつねに、親孝行として、一定の期間悼み悲しんで喪に服する義務がある。しかし、がん固にいつまでも悲観に暮れるのは、よくない強情というものだ。めめしい嘆きだ。神に対し素直でない我意というものじゃ。道心堅固ならざる者じゃ。だだっ子じゃ。教育のない愚か者じゃ。だつて、お前、どうしても仕方がないこと、日常最もありふれたことに、小ざかしく逆つて、心をいためる必要はないじゃないか？ くだらない！ まったく神に対し、死者に対し、自然に対して罪悪じゃ。道理に少しも耳を貸さぬがん迷というものじゃ。父親が先立つのは普通のこと、はじめてしかばねとなった人間から今日死んだ者に至るまで、『これが定めだ』と、いつも道理は叫んで来た。お前も無益な悲しみを地に投げ打って、わしをほんとうの父と思ってくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、わしは実の父親が子供に抱く愛情に劣らぬ慈愛をもつてお前を愛するということを、世間によく見て貰いたいのだ。それから、ウイッテンベルクへ再び留学したいというお前の志は、わしの最も好まぬところ、どうかまげてこの国に留まって、わしたちの慈愛の眼になぐさめられ、はげまされて、わしの側臣のもっとも重きをなす者、親身の者、かついとしの息子となつておくれでないか？」と言う。妃も、「……ハムレット、お母さんのお願いを無にしないで頂戴。どうぞわたしたちのそばに留まって、ウイッテンベルクには行かないでね」と言う。すると、ハムレットは、「……はいはい。つとめて母上のおおせに従います」と言うのであった。

(本文)

*

*

さて、いよいよ主人公（ハムレット）の登場であるが、まず、「……（傍らを向いて）親類以上だが、情愛は親類以下のくせに」と呟く。これは、何かと問えば、それは、まさにハムレットの「心の声」なのである。——つまり、国王とハムレットとの関係、それは、まさに「……義父であるので、親戚以上だが、一方、情愛（ハムレットを思う本音）は、親類以下のくせに」となるのである。そして、国王（クローディアス）は、「……なぜ、そなたの顔に相変らず曇がかかっているのだ？」と聞く。それは、先王の死後、約二月前後も、ずっと「ハムレットの顔に曇がかかっている状態が続いている」からである。すると、ハムレットは、「……いや、陛下、ぼくは日向の青天井に居過ぎますよ」と言う。さて、これには幾つかの「解釈」があり、例えば、「……晴れやかすぎる光の中に」ということで、いわば「恵まれた環境」に居過ぎて「食傷気味」であるとか、また、国王（叔父）から息子呼ばわりされて迷惑であるとか、或いは、「……青空の下で寝起きする家なき流浪の身の上」ということで、叔父に王座を奪われ、ハムレットは、自分をいわば貧しい「乞食」同様の境遇とあてつけて見ている、その他、そのようなものである。

すると、王妃は、「……ねえ、ハムレット、夜のような暗い曇りを払いのけて、もっと親しみの眼差しを国王にお向けなさい。土になられたおとうさまを、いつまでもそんな伏

目勝ちに、恋しがるものじゃないことよ。人の常ではありませんか、生きてる者が一度は死ななければならぬことには？ それは生身の生涯を経て永遠の世界に入るのですわ」と言うのである。それは、まさに「その通り」であり、それゆえ、ハムレットも、「……そりゃ、お母さん、世の常に違ひないですよ」と言う。すると、王妃は、「……それなら、なぜあなただけが、それにむずかしくこだわっていなさるような風をしているのです？」と聞く。これは、当然の「問いかけ」であり、一体、どうしてなのだと、誰もが聞きたくなる場所である。それは、次のようなことである。——つまり、心から愛する先王の突然の死、それがまさに「腑に落ちない」のである。何かおかしいという感じであり、しかも、「葬儀」から「婚儀」へが余りにも早過ぎるという感じ、それは、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いがあると思っていたその「叔父」（クローディアス）と何と結婚をしてしまい、しかも、その半人半獣のような叔父に喜んで身をゆだねている母親の存在への不信、そのようなものがハムレットの「心の中」にはつきりとあるからこそ、まさに「……ハムレットの顔にずっと曇がかかっている状態が続いている」のである。

それ故に、ハムレットは、次のように言うのである。つまり、「……ような風？ お母さん、違う！ 僕のはほんものですよ。ような風なんて、ぼくには出来ない。この真黒な外とう、また世の習いのしかつめらしい喪服、わざとらしい吐息溜息、眼から流れる涙の川、しよげた顔付、その他悲しみのあらゆる様式や姿を集めたって、そんなものだけでは、ぼくのほんとうの気持をよく現してくれないんです。確かに、それらは『ような風』のもの、誰にでもやれる芝居でさ。悲しみの飾りや衣装に過ぎないものです。けれどぼくの心の中には、そんな眼に見えるものでは現わせないものがあるんです」と言うのである。

すると、国王は、「……ハムレット、おとうさんにそのような哀悼を捧げるのは、子たる者として、誠に美しい、立派な態度じゃ。けれど、よくわきまえねばならないことは、お前のおとうさんは、またそのおとうさんを亡くし、そのおとうさんも、また、御自分のおとうさんを亡くしておられる。そしてあとに残された者はつねに、親孝行として、一定の期間悼み悲しんで喪に服する義務がある。しかし、がん固にいつまでも悲観に暮れるのは、よくない強情というものだ。めめしい嘆きだ。神に対し素直でない我意というものじゃ。だつて、お前、どうしても仕方がないこと、日常最もありふれたことに、小ざかしく逆つて、心をいためる必要はないじゃないか？ くだらない！ まったく神に対し、死者に対し、自然に対して罪悪じゃ。父親が先立つのは普通のこと、はじめてしかばねとなった人間から今日死んだ者に至るまで、『これが定めだ』と、いつも道理は叫んで来た」と言うのである。——これは、まさに「その通り」であり、永遠に変わりようのない「真理」ではあるが、それゆえ、ハムレットにしても、心から愛する「先王」の突然の死、それが十分に納得のいくようなものであれば、ハムレットとしても、その先王の「死」を素直に受け入れることはでき得たのである。ところが、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来た様々な「疑念や不信」などがはつきりとあるからこそ、心から愛する「先王」の突然の死を、そのまま素直に受け入れることができずにいるのである。

一方、国王は、「……父親が先立つのは普通のこと、はじめてしかばねとなった人間から今日死んだ者に至るまで、『これが定めだ』と、いつも道理は叫んで来た。お前も無益な悲しみを地に投げ打って、わしをほんとうの父と思ってくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、わしは実の父親が子供に抱く愛情に劣らぬ慈愛をもってお前を愛す

るといふことを、世間によく見て貰いたいのだ。それから、ウィッテンベルクへ再び留学したいというお前の志は、わしの最も好まぬところ、どうかまげてこの国に留ま^{とど}つて、わしたちの慈愛の眼になぐさめられ、はげまされて、わしの側臣^{そくしん}のもつとも重きをなす者、親身^{おんみ}の者、かついとしの息子となつておくれでないか？」と云うのであつた。

例えば、国王に、「……お前も無益な悲しみを地に投げ打つて、わしをほんとうの父と思つてくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、わしは実の父親が子供に抱く愛情に劣らぬ慈愛をもつてお前を愛する」といくら言われても、ハムレットの「頭の中」(或いは「心の中」)には叔父(クローディアス)に対する様々な「疑念や不信」などがはつきりとあるのであり、それゆゑ、国王のそのような「言葉」をいくら聞かされても、そのまま素直に受け入れることはでき得ないのである。また、国王の「……ウィッテンベルクへ再び留学したいというお前の志は、わしの最も好まぬところ、どうかまげてこの国に留ま^{とど}つてほしいということ」、また、王妃も、「……ハムレット、お母さんをお願いを無にしないで頂戴。どうぞわたしたちのそばに留ま^{とど}つて、ウィッテンベルクには行かないでね」といふ、この「再び留学する」といふことだけは、ハムレットは、「……はいはい。つとめて母上のおおせに従います」と素直に従っているが、しかし、「……わしたちの慈愛の眼になぐさめられ、はげまされて、わしの側臣^{そくしん}のもつとも重きをなす者、親身^{おんみ}の者、かついとしの息子となつておくれでないか？」ということに關しては、ハムレットの「頭の中」(或いは「心の中」)でははつきりと強い「拒絶反応」を示しているのである。

*

*

さて、国王は、ハムレットの「……はいはい。つとめて母上のおおせに従います」といふ言葉を聞いて、「……これは、またとない色よい返事でうれしいぞ。デンマークに留ま^{とど}つて、わし同様に王者のように振舞いなさい。さあ、妃、ハムレットが素直に心よく承諾してくれて、わしも愁眉^{しゆうび}が開けてうれしいわい。その心祝^{こころいわい}に、今日デンマーク王が挙げる祝杯は、一つ一つ、大砲を曇の上に打ち上げて、われわれの賀宴^{がえん}を知らせよう。天もデンマーク王の乾杯^{かんぱい}に木魂^{こたま}して、地上のとどろきに答えさせよう。さあ、行こう」と晴れやかに退場していくのである。……

ラッパの吹奏^{すいそう}のうちに、ハムレット一人を除き一同退場していく……

さて、ハムレットは、「……ああ、このあまりにも汚れた肉体が溶けて崩れて、一しずくの露となつたらいいのに。それとも、自殺を罪とするおきてなどを、神がきめなければよかつたのに。あゝ、ああ！ この世の有様は何もかも面白くない。つまらない、味気ない、生き甲斐がない。あゝいやだ、いやだ、雑草の生え放題、世にもあさましい醜草どもに完全に占領されている。ああ、こんなことになろうとは！ 亡くなつてからわずか二月。いや、まだ二月もたつていない。あんなすぐれた王様。あれとこれとは、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いだ。お母さんの顔に風がきつく当ることさえ気にされたほど愛情のこまやかな方^{かた}だつたのに。ああ！ 思ひ出すのもいやだ、お母さんは食べる程食欲が募りでもしたように、おとうさま(の愛情)にかじりついていたものだ。それが、なんだ、一ヶ月もたたないうちに。もう思ふまい。弱き者よ、汝の名は女なり！ やつと一ヶ月、ナイオビのように全身涙にかきくれて、おとうさまの亡骸^{なきがら}を送つて行かれた時の靴^{くつ}がまだ

古くもならない内に、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獸けものでさえ、もう少し長く喪に服したろうに、兄弟とは言うものの、このおれとヘラクレスのように似てもつかない人と、しかも一月もたたない内に、偽いつわりの涙の塩が泣きただれた目元にまだ赤い色をとどめている内に結婚してしまった。破倫はりんの床とこへあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業はやわざだ！ よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！ しかし、待て、この胸が張りさけても、おれは黙ってなければならぬわ」と言うのであった。(本文)

*

*

さて、この場面は、非常に有名な「場面」であり、それゆえ、その一つ一つを丁寧に考えてみたいと思うが、まず、「……ああ、このあまりにも汚れた肉体が溶けて崩れて、一しずくの露となつたらいいのに、それとも、自殺を罪とするおきてなどを、神がきめなければよかつたのに」とある。これは、いかにもハムレットの「自殺願望」のように思われがちであるが、しかし、決してそうではなく、それは、例えば、実際に首を吊つて死のうとか、また、高い所から実際に飛び降りて死のうとか、あるいは、実際に自分の胸を短刀で刺して死のうとか、その他、そのように実際に具体的に「自殺」を考えているというのではなく、そうではなくて、ハムレットの「頭の中」(或いは「心の中」)には様々な「疑惑や不信」などがあつて、ハムレットは、そのために「自分の心」を実に様々に「悩まし、苦しめてい」て、もう何もかもが嫌になつて、いつそ死にたい、という一般的な心理に近く、それは、まさに「相対的な感情」(気分)であり、決して具体的な「自殺願望」とは違うのである。次に、「……ああ、この世の有様は何もかも面白くない。つまらない、味気ない、生き甲斐がない。あゝいやだ、いやだ、雑草の生え放題、世にもあさましい醜草しうくさどもに完全に占領されている」とある。これは、例えば、国王や王妃などをはじめ、この世の「有様」は、まさに「雑草の生え放題」(碌でもない人間たち)で満ち、しかも、世にもあさましい醜草しうくさども(俗悪ども)に完全に占領されている。だからこそ、「……この世の有様は、何もかも面白くない。つまらない、味気ない、生き甲斐がない」となるのである。そして、ハムレットの「心の中」をそういう「気分」にしている、まさにその直接の「原因」が次に語られているのである。それは、次のようなものである。

つまり、「……ああ、こんなことになろうとは！ 亡くなつてからわずか二月。いや、まだ二月もたつていない。あんなすぐれた王様。それは、アポロンの神と半人半獸の怪物ほどの違いであり。お母さんの顔に風がきつく当ることさえ気にされたほど愛情のこまやかな方かただつたのに。ああ！ 思ひ出すのもいやだ、お母さんは食べる程食欲が募りつものでもしたように、おとうさま(の愛情)にかじりついていたものだ。それが、なんだ、一ヶ月もたたないうちに。もう思うまい。弱き者よ、汝の名は女なり！ やつと一ヶ月、ナイオビのように全身涙にかきくれて、おとうさまの亡骸なきがらを送つて行かれた時の靴くつがまだ古くもならない内に、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獸けものでさえ、もう少し長く喪に服したろうに、兄弟とは言うものの、このおれとヘラクレスのように似てもつかない人と、しかも一月もたたない内に、偽いつわりの涙の塩が泣きただれた目元にまだ赤い色をとどめている内に結婚してしまった。破倫はりんの床とこへあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業はやわざだ！ よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！ しかし、待て、この胸が張りさけても、おれは黙ってなければならぬわ」となる

のである。そして、これこそは、まさにハムレットの「憂鬱」の直接の原因にもなっているものである。

ちなみに、「葬儀」と「婚儀」と「戴冠式」との「関係」であるが、それは、次のようになるかと思う。——つまり、「葬儀」(それは「わずか二月ぐらい前に」)↓「婚儀」(それは「一月もたたない内に」)↓「戴冠式」(それは「約二月ぐらい後の今日」)になるのである。

——ホレーシオ、マーセラスおよびバーナードの登場となる——

まず、ホレーシオは、「……ご健勝を御祝い申し上げます」と言う。ハムレットは、「……みんなも元気で結構。あつ、ホレーシオ！ それともぼくの眼の狂いか？」と言うと、ホレーシオは、「……仰せの通りの者で、常に忠実な臣下ホレーシオでございます」と言う。ハムレットは、「……いや、君は僕の友人だよ。君とぼくとはお互いにそう呼び合いたいものだ。(兩人握手する)。時に、ホレーシオ。ウィットテンベルクを飛び出して何をしているんだ！ あつ、マーセラスか」と言い、(ハムレット手をさしのべる)。マーセラスは、「殿下！」と言い、ハムレットは、「……や、ようこそ、君もようこそ、(バーナードに会釈する)。だが、実際、ウィットテンベルクを飛び出して何をしているのか？」と聞く。すると、ホレーシオは、「……殿下、抜け遊びなのです」と言う。すると、ハムレットは、「……ぼくは君の敵にさえ、そんなことを言わせては置かないよ。また、君の自己中傷をばぼくの耳に信じさせようなんて、ふざけすぎるよ。いや、君は抜け遊びする学生ではない。しかし、エルシノアなんの用があつたのだ？ 帰るまでに大酒をお酌することも仕込んでやるぞ」と言う。ホレーシオは、「……殿下、父君のご葬儀を拝観に参りました」と言う。ハムレットは、「……君、学友たる僕をなぶつてはいけない。ほんとうは、母上の結婚式を見に来たのだろう？」と言う。ホレーシオは、「……確かに、間近う続いて上げられましたな」と言う。それに対して、ハムレットは、「……儉約だよ、儉約……。お葬式の時の焼き肉が冷えて婚礼の宴会に出たのさ。あんないやな日にめぐり合わせるくらいなら、天国で憎い敵にめぐりあつた方がましだ！ ホレーシオ。僕の父が、ああ、父の姿が目に見えるようだ」と言うのであつた。(本文)

*

*

さて、先王の「亡霊」を見た、三人(バーナードとマーセラスそれにホレーシオ)、特にハムレットの親友(学友)でもあるホレーシオは、「……今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじゃない」かということ、今、ここに来ているのである。そして、そのホレーシオの姿を見たハムレットは、「……あつ、ホレーシオ！ それともぼくの眼の狂いか？」と言うと、ホレーシオは、「……仰せの通りの者で、常に忠実な臣下ホレーシオでございます」と言う。ハムレットは、「……いや、君は僕の友人だよ。君とぼくとはお互いにそう呼び合いたいものだ。(兩人握手する)。時に、ホレーシオ。ウィットテンベルクを飛び出して何をしているんだ！」と聞く。——まず、ここまでの「会話」だけを見てみると、ハムレットは、ホレーシオがデンマークに来ていることを全く知らなかったことになる。そして、今、初めて「会つた」という感じになっている。だからこそ、「……ホレーシオ。ウィットテンベルクを飛び出して何をしているんだ！」ということになるの

である。すると、ホレーシオは、「……殿下、抜け遊びなのです」と言う。この「抜け遊び」というのは、まさに「……授業（学業）を抜け出して、遊びに来ている」ということであるが、それを聞いたハムレットは、「……ぼくは君の敵にさえ、そんなことを言わせては置かないよ。また、君の自己中傷をばくくの耳に信じさせようなんて、ふざけすぎるよ。いや、君は抜け遊びする学生ではない。しかし、エルシノアになんの用があったのだ？」と、再び、聞いている。これは、一体、どういうことなのかと問えば、それは、ハムレットという人は、心から愛する先王の「死後」は、余りにもそのことばかりに囚われ過ぎてしまい、つまり、自分の「心の中」に深く閉じ籠もって、その「心」を閉ざしていたので、まわりの様々な「様子」が普段よりはあまりよく見えてはいなかったということであり、普段であれば、多くの人たちの中からホレーシオの姿を見つめることもでき得たかも知れないが、いつも「伏目勝ち」にしていたハムレットの「目」には、ホレーシオの姿はなかなか見えてはこなかったということになるのだろう。

ところで、その「ホレーシオ」という人は、一体、どのような人物であるのか、という問題が生じるが、それは、次のようになるかと思う。——まず、ハムレットは、先王（父親）の突然の「崩御」により、今は、デンマークに戻っているが、それまではドイツの「ウイッテンベルクの大学」に留学していて、その時の「学友」こそは、まさに「ホレーシオ」という人物であり、しかも、その「大学」というのは、いわば「神学校」であり、それゆえ、ハムレットの学友でもある「ホレーシオ」という人物は、大学で「神学や哲学」などを本格的に勉強や研究をしている人物になるのである。その場合、「ホレーシオ」という人物は、そのまま「学生」なのか？ それとも、最初の記述の「学者」ということになるのか？ それとも両方を兼ねているのか？ そして、ハムレットの話しぶりからすれば、ホレーシオという人物は、非常に優秀でまじめな性格であり、また、酒もそれほどは飲まず、しかも、ハムレットにとつて最も信頼できる人物という設定になっているかと思う。

さて、ホレーシオは、「……殿下、父君のご葬儀を拝観に参りました」と言う。つまり、先王の「葬儀」を見に来たのですと言うと、ハムレットは、「……君、学友たる僕をなぶってはいけない。ほんとうは、母上の結婚式を見に来たのだろうか？」と言う。ホレーシオは、「……確かに、間近う続いて挙げられましたな」と言う。——これは、本来であれば、ある一定期間、喪に服するのが通例かと思うが、今回は、「間近う続いて挙げられましたな」とある。だとすれば、全く「同じ日、同じ時」ではなく、極めて短い間に、まさに「葬儀」と「婚儀」とがいわば立て続けに行なわれたということであり、それに対して、ハムレットは、「……儉約だよ、儉約……。お葬式の時の焼き肉が冷えて婚礼の宴会に出たのさ」と、皮肉たつぷりに言うのである。——つまり、先王の「葬儀」で使い残った「料理」（焼き肉）が、母親と叔父の「婚儀」の時にその「料理」（焼き肉）が冷えて出て来たということであり、それくらい「短期間」に「葬儀」と「婚儀」とが続けて行なわれたと言いたいのである。それとも、文字通りの意味なのかは判別しがたい。そして、ハムレットは、「……あんないやな日（結婚式）にめぐり合わせるくらいなら、天国で憎い敵にめぐりあつた方がまだましだ！」と言うのである。そのくらい「いやだった」ということである。そして、ハムレットが、「……ホレーシオ。僕の父が、ああ、父の姿が目に見えるようだ」と言うと、ホレーシオは、その「言葉」に敏感に反応するのである。

さて、ここからは、「ハムレット」と「ホレーシオ」の交互の「対話」になるが、まず、ハムレットが、「……ああ、父の姿が見に見えるようだ」と言うと、ホレーシオは、「……どこにです？ 殿下？」と聞くと、「……ぼくの心の眼にさ」と言う。ホレーシオは、「……私も一度はお目にかかったことがあります、ご立派な王様であらせられました」、「……どの点から見ても、再びああいう人物は見られまい」、「……殿下、じつは昨夜お目にかかったように思うのですが」、「……お目にかかった？ だれに？」、「……おん父君陛下です」、「……なに、父君に！」、「……さ、その驚きをしばらく鎮められて、申上げる不思議な話をよくお聞き下さい。証拠人はこの二人です」、「……ふむ、ぜひとも聞かして貰いたい」、「……じつは、このマーセラスとバーナードの両君が二晩続けて、しんしんと更け渡った真夜中の見張時に見られたのです。おん父君によく似た姿が、頭からつま先まですきもなく甲冑で固められて、現れたのです。そして、いかめしい足取りで、ふたりの傍をせず、堂々と往きなさいました。迷い驚く眼と鼻の先を三度まで通られました。ふたりはあまりの恐ろしさに寒天のようにブルブルふるえ、口もきけずしやちこぼったままで、言葉もかけられなかったのです。この事を御両君は恐る恐る内密に私に報告されました。そこで三日目の晩、私もともに見張に出ました。ところが、時間と言ひ、姿、形と言ひ、聞いた通りに、現れたのです。私は御父君を存じ上げていますが、この手とこの手だつて、あれ程似てはいません」、「……しかし、そりやどこで起こったことなのか？」、「……夜警をしましたあの城壁の上です」、「……ものを言ってみなかつたのか？」、「……言いました。ですが、なんとも答えません。ただ一度だけ、頭をあげ、ものを言いたげに、口元を動かす気配を見たようでしたが、丁度鶏が大きな声で時をつくつたので、その声にひるんで、あわてて姿をかき消しました」、「……変な話だな！」、「……殿下、まさしくこれはほんとうのことなのです。そして私どもは、殿下にお知らせ申す義務があると思ひましたので」と言うのである。(本文)

*

*

さて、ハムレットの親友(学友)でもある「ホレーシオ」は、ハムレットに、深夜十二時過ぎに現れた、先王の「亡霊」の話をすることになるが、まず、ハムレットが、「……ああ、父の姿が見に見えるようだ」と言うと、ホレーシオは、「……どこにです？ 殿下？」と聞く。これは、実際に「……先王の姿が見えているのか」と一瞬思っている状態であるが、もちろん、ハムレットは、「……ぼくの心の眼にさ」と言うのを聞いて、ホレーシオは、あらためて、「……殿下、じつは昨夜お目にかかったように思うのですが」と語り始めるのである。この「お目にかかったように思うのですが」というのは、さすがに「亡霊」の話なので少しためらいがちに感じであり、すると、「……お目にかかった？ だれに？」、「……おん父君陛下です」、「……なに、父君に！」、「……さ、その驚きをしばらく鎮められて、申上げる不思議な話をよくお聞き下さい。証拠人はこの二人です」となるのである。そして、ハムレットは、「……ふむ、ぜひとも聞かして貰いたい」、「……じつは、このマーセラスとバーナードの両君が二晩続けて、真夜中の見張時に見られたのです。おん父君によく似た姿が、頭からつま先まですきもなく甲冑で固められて、現れたのです。そして、いかめしい足取りで、ふたりの傍をせず、堂々と往きなさいました。ふたりはあまりの恐ろしさに寒天のようにブルブルふるえ、口もきけずしやちこぼったままで、言葉もかけられなかったのです」となつて行くのである。

そして、「……この事を御両君は恐る恐る内密に私に報告されました。そこで三日目の晩、私もともどもに見張に出ました。ところが、時間と言い、姿、形と言い、聞いた通りに、現れたのです。私は御父君を存じ上げていますが、この手とこの手だつて、あれ程似てはいません」、「……しかし、そりやどこで起こったことなのか?」、「……夜警をしましたあの城壁の上です」、「……ものを言ってみなかつたのか?」、「……言いました。ですが、なんとも答えません。ただ一度だけ、頭をあげ、ものを言いたげに、口元を動かす気配を見たようでしたが、丁度鶏が大きな声で時をつくつたので、その声にひるんで、あわてて姿をかき消しました」と言う。すると、ハムレットは、「……変な話だな!」と言い、ホレーシオは、「……殿下、まさしくこれはほんとうのことなのです。そして私どもは、殿下にお知らせ申す義務があると思ひましたので」と続くのである。

この「場面」は、まさに書いてある通りであるが、面白いと思うのは、全く「同じ話」を聞いた時の、二人(ホレーシオとハムレット)の「反応」の違いであり、まず、ホレーシオは、「……僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言つて、てんで信じようとしなかつた」、また、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言つて、全く興味も関心も示さなかつたのである。——一方、ハムレットは、「……変な話だな!」と言いなながらも、その「話」にやがて興味や関心を示すようになるが、その「違い」は、一体、何なのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、ホレーシオにとつて、先王の「亡霊」の出現話は、学問上は、なかなか「考え難い」とともに、ホレーシオとは直接は関係ない先王の「亡霊」の出現話でもあるからであるが、一方、ハムレットにとつては、確かに、ホレーシオと同じように、学問上は、なかなか「考え難い」と思つても、それが、まさに「……変な話だな!」ということであるが、しかし、心から愛していた先王(実の父親)の「亡霊」の出現話であつてみれば、いやが上にも興味や関心を示さざるを得ないようになっていくのは当然のことである。

さて、ホレーシオの、「……私どもは、殿下にお知らせ申す義務があると思ひまして」という言葉を受けて、ハムレットは、「……もつとも至極。だが、ぼくは胸騒ぎがして来る。今夜も見張りをするのか?」、バーナードとマーセラスは、「さようです」、「……甲冑で固め、というのだな?」、バーナードとマーセラスは、「さようです」、「……頭からつま先まで?」、バーナードとマーセラスは、「仰せの通りで」、「……では、顔は見なかつたのだね?」と聞くと、ホレーシオは、「……いや、見ました。顔を上げていましたから」、「……ほう! 不機嫌そうに見えたか?」、「……怒りというよりは悲しみを帯びた顔でした」、「……青ざめていたか? 赤かつたか?」、「……大へん青ざめて」、「……そして、じつと君を見つめていたのか?」、「……はい、じつと」、「……ぼくはその場に居合わせたかつた」、「……ほんとうにびつくりされたことでしょう」、「……そうだろう、そうだろう、長く留まつていたか?」、「……さよう、普通の速さで百数えるくらいでしたらう」、バーナードとマーセラスは、「……いや、いや、もつと長かつた」と言う。ホレーシオは、「……僕が見た時はそう長くはなかつた」、「……ひげは灰色だった、そうでなかつた?」、ホレーシオは、「……御在世中に拝した通り、灰色がまじつた黒いおひげでした」と言ふと、ハムレットは、「……今夜はぼくも夜警に立とう。もしかしたら、また現れるだろう」、ホレーシオは、「……必ず出るに相違ありません」と言う。ハムレット

は、「……もしも父君のおん姿を帯びて出るなら、たとえ、地獄が口をあけて、黙れ！
と言おうとも、ぜひ話しかけてみよう。君たちがこのまぼろしについて今までだれにも言
わなかったのなら、今後も同様固く内密にしていって貰いたい。また、今夜、ほかに何事が
起ころうとも、決して吹聴しないで、ただ胸の中に納めておいてくれ給え。諸君の行為
に対しては後日報いるつもりだ。ではさよなら。城壁の上で、十一時と十二時の間に、
君たちに会いに行こう」と言う。すると、一同、「……かしこまりましてございます」と
言う。ハムレットは、「……そんなもの、言いはしないで。われわれは友人同士の仲じゃな
いか？　では、さよなら」と告げる。——ハムレット一人を除いて一同退場——。

ハムレットは、「……父君の亡霊が甲冑に身を固めて！　なんかあるんだ。なんか、け
しからん事があるんだ。夜の来るのが待ち遠しい。それまでは、心よ、じっと落付いてお
れ。悪い行いは、たとえ大地がおおい匿そうとも、人の眼に頭れて来るものだ」と言う
のであった。——ハムレット退場——（本文）

*

*

さて、「第二場」の最後の場面であるが、ホレーシオの、「……私どもは、殿下にお知
らせ申す義務があると思ひまして」という言葉を受けて、ハムレットは、「……もつとも
至極。だが、ぼくは胸騒ぎがして来る。今夜も見張りをするのか？」と聞く。……

まず、ハムレットは、ホレーシオの、先王の「亡霊」の出現話を聞いて、「……ぼくは
胸騒ぎがして来る」というように、はつきりと「興味や関心」を示すようになることもに、
今度は、それを一つ一つの具体的に「検証」するかのようになり、ハムレットは、「……甲冑で
固め、というのだな？」「さようです」「……頭からつま先まで？」「仰せの通りで」、
「……では、顔は見なかったのだね？」「いや、見ました。顔を上げていましたから」、
「……不機嫌そうに見えたか？」「怒りというよりは悲しみを帯びた顔でした」「……
青ざめていたか？　赤かったか？」「大へん青ざめて」「……そして、じっと君を見つ
めていたのか？」「はい、じつと」「……ぼくはその場に居合わせたかった」「ほんとう
にびっくりされたことでしょうか？」「……そうだろう、そうだろう、長く留まっていた
か？」「さよう、普通の速さで百数えるくらいでしたらう」「……いや、いや、もつと
長かった」「……僕が見た時はそう長くはなかった」「……ひげは灰色だった、そうで
なかった？」「……御在世中に拝した通り、灰色がまじった黒いおひげでした」と、続
くのである。そして、ここまで聞いて、ハムレットは、彼らの話に「虚言」はないと、は
つきりと「確信」が持てたからこそ、次のように言うのである。

つまり、ハムレットは、「……今夜はぼくも夜警に立とう。もしかしたら、また現れる
だろう」、ホレーシオは、「……必ず出るに相違ありません」と言う。その確信に充ちた
言葉を聞いて、ハムレットは、「……もしも父君のおん姿を帯びて出るなら、たとえ、地
獄が口をあけて、黙れ！　と言おうとも、ぜひ話しかけてみよう」と、決心するのであつ
た。それは、なぜ、深夜、先王の「亡霊」が連夜出没するのか？　その「理由」を何が何
でも聞きたいということであり、また、「……君たちがこのまぼろしについて今までだれ
にも言わなかったのなら、今後も同様固く内密にしていって貰いたい。また、今夜、ほかに
何事が起ころうとも、決して吹聴しないで、ただ胸の中に納めておいてくれ給え。諸君
の行為に対しては後日報いるつもりだ。ではさよなら。城壁の上で、十一時と十二時の
間に、君たちに会いに行こう」と言う。——それでは、なぜ、「……君たちがこのまぼろ

い、について今までだれにも言わなかったのなら、今後も同様固く内密かたにしていって貰いたい」と言うのだろうか？ それは、先王の「亡霊」が自分だけ（ハムレットだけ）に話しかけたいと切に願っているとするれば、それは、恐らく、「国王や王妃」などに知られることを何よりも恐れているからに違いないと直感ちくかんしているからである。

そして、ハムレットは、次のように「自問自答」するのである。「……父君ちじぎみの亡霊が甲冑かちゆうに身を固めて！ なんかあるんだ。なんか、けしからん事があるんだ。夜の来るのが待ち遠しい。それまでは、心よ、じつと落付おちついておれ。悪い行いは、たとえ大地がおおい匿かくそうとも、人の眼あからわに顕あれて来るものだ」と言うのであった。

*

*（第一幕第二場・終了）

第二場 ポローニアス邸の一室

第三場 ポローニアス邸の一室

レアティーズとその娘のオフィーリアの登場。

さて、内大臣（ポローニアス）の息子（レアティーズ）の登場であるが、彼は、留学先のフランスへ戻るといふことで、「……もう手廻りの品々は積込んだ。じゃ、さよなら。順風（じゆんふう）便船（びんせん）がある限り、精出して便りをおくれよ」と言う。オフィーリアは、「大丈夫」と言い、レアティーズは、「……それからハムレットがお前にいい加減なお愛想をいつているようだが、ありや血の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思つたらよい。人生の春のすみれみたよなもので、早咲きだが永くは続かない。香いはよいが持ちが悪い。ちよつとの間樂（ま）しませてくれる香水みたよなもので、それ以上のもではないよ」と言う。妹のオフィーリアは、「……ただそれだけのもの？」と聞くのであった。（本文）

*

*

まず、最初、ポローニアスという人物であるが、この人物は、「宰相」とも「内大臣」とも「侍従長」とも呼ばれているかと思うが、その「官職」は、ここでは「国王のそばに仕えて、国王を補佐する最高位の官吏」ということであり、しかも、ポローニアスは、現国王（クローディアス）からは、「……デンマークの王座とお前の父上との関係は、頭と心よりもつと近しく、手が口の用を務める以上に密接な仲なのだ」と、絶大の「信頼」を寄せられているとともに、その息子（レアティーズ）に対しても、「……お前が所望するたいていの事は、所望ではなくて、わしの方から進上したい程だ」と、父親同様に国王からは高い「信頼」を得ているのである。そして、そのレアティーズは、妹のオフィーリアに向つて、「……ハムレットがお前にいい加減なお愛想をいつているようだが、ありや血の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思つたらよい。人生の春のすみれみたよなもので、早咲きだが永くは続かない。香いはよいが持ちが悪い。ちよつとの間樂（ま）しませてくれる香水みたよなもので、それ以上のもではないよ」と言うのである。

ところで、その「せりふ」の中に、「……ありや血の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思つたらよい。人生の春のすみれみたよなもので、早咲きだが永くは続かない。香いはよいが持ちが悪い。ちよつとの間樂（ま）しませてくれる香水みたよなもので、それ以上のものではない」とあるが、それを少し直すと、「……ありや血の多い若い者が誰でもやる手で、気まぐれだと思つたらよい。人生の春のすみれのようなもので、早咲きだが永くは続かない。また、香いはよいが持ちは悪く、ちよつとの間樂（ま）しませてくれる香水のようなもので、それ以上のものではない」ということである。すると、妹のオフィーリアは、「……ただそれだけのもの？」と疑問を投げかけることになるが、それは、もつと何かがあると思いたいということである。

すると、兄のレアティーズは、「……それだけのものと思うがよい。育ちざかりの人間は、肉や柄（がら）ばかりが大きくなるのではない。この肉体という殿堂は、ふとるにつれて、中の心や魂の力も同時に大きくなる。そりや多分、今はお前を愛しているだろう。その純粋な気持をけがすような汚（きた）い心や偽（いつわ）りは全然ないだろう。しかし、考えにやならんことは、ハムレットの高い身分を思うと、万事自分の心の通りにはならないのだ。生れが生れ故に、

しもじものするように、自分勝手に切盛りの出来ない方なのだ。あの人の心一つで、国全体の安全と福祉とが左右されるのだ。だから、元首といただく国民の承認や賛成の上でなければ、妻の選択も出来かねるんだ。お前を愛するとおっしゃっても、特別な地位にあつて気ままに振舞えない人が約束した事はどれだけ実現が出来るか、その範囲において、信じて置く方が賢明だよ。デンマーク国民全体の賛成をまつて初めて実現されるのだから。うっかりあの人の恋の歌に耳を貸し、愛を捧げたり、大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オフィリア、恐ろしいことだよ。まあ、愛情の後陣に下つて、愛欲の矢玉から遠ざかっているのがよいね。憤み深い乙女は、お月様に綺麗な顔をあらわに見せるだけでもみだらなことだよ。貞操そのもののような女でも、世間の悪口の毒矢は逃れないもの。春の若草も、つぼみの開かない内に、悪い虫に食われてしまうことがよくあるからね。うら若い青春の朝の露に、悪い毒氣が一番ひどく当るものだ。だから警戒するがよい。万全の策は用心にあり、青春はとかく己れに謀反したがるもの、そばに誘惑する人が居なくとも」と言う。オフィリアは、「……兄さんの御もつともなお諭しは心の番人として、大事にこの胸のうちにたたんで置きますわ。けれど、兄さん、罰当りの坊さんのように、人には天国へ登る険しいばらの道を教えながら、御自分はその忠告を柵に上げて、脂太りした道楽者のように歓楽の花咲く道を歩きなさいますなよ」と言う。(ポローニアスの登場) (本文)

*

*

さて、兄のレアティーズは、「……それだけのものと思うがよい。(中略)、そりや多分、今はお前を愛しているだろう。その純粋な気持をけがすような汚い心や偽りは全然ないだろう。しかし、考えにやならんことは、ハムレットの高い身分を思うと、万事自分の心の通りにはならないのだ。生れが生れ故に、しもじものするように、自分勝手に切盛りの出来ない方なのだ。あの人の心一つで、国全体の安全と福祉とが左右されるのだ。だから、元首といただく国民の承認や賛成の上でなければ、妻の選択も出来かねるんだ。お前を愛するとおっしゃっても、特別な地位にあつて気ままに振舞えない人が約束した事はどれだけ実現が出来るか、その範囲において、信じて置く方が賢明だよ。デンマーク国民全体の賛成をまつて初めて実現されるのだから。うっかりあの人の恋の歌に耳を貸し、愛を捧げたり、大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オフィリア、恐ろしいことだよ。まあ、愛情の後陣に下つて、愛欲の矢玉から遠ざかっているのがよいね。(中略)、春の若草も、つぼみの開かない内に、悪い虫に食われてしまうことがよくあるからね。うら若い青春の朝の露に、悪い毒氣が一番ひどく当るものだ。だから警戒するがよい。万全の策は用心にあり、青春はとかく己れに謀反したがるもの、そばに誘惑する人が居なくとも」と言う。——これは、心の底から妹のオフィリアのことを心配しているのであり、「……大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オフィリア、恐ろしいことだよ。世間の悪口の毒矢は逃れられないもの」であり、だからこそ、「……警戒するがよい。万全の策は用心にあり、青春はとかく己れに謀反したがるもの、そばに誘惑する人が居なくとも……」となるのである。これは、これで兄としての立派な忠告であり、それゆえ、妹のオフィリアも、「……兄さんの御もつともなお諭しは心の番人として、大事にこの胸のうちにたたんで置きますわ。けれど、兄さん、罰当

りの坊さんのように、人には天国へ登る険しいいばらの道を教えながら、御自分はその忠告を棚に上げて、脂太りした道楽者のように歓楽の花（女性たちの）咲く道を歩きなさいますなよ」と、今度は逆に妹から兄へと切り返しているのである。

レアティーズは、「……なあに、ぼくのことは心配ないよ。だがつい長居しすぎた。やつ、おとうさんがいらした。重ねて祝福を受けることは、重ねて神から恵まれることで有難い。もう一度お別れを告げるよい機会が舞い込んだというもの」と言う。

ポローニアスは、「……レアティーズ、まだここにかい？ 困った奴だな！ さあ、乗り込んだり、乗り込んだり。帆はとうに風をはらんで、みんなが待っている。それ！ わしの祝福を受けなさい。（レアティーズの頭に手を置く）。これから言つて聞かせる戒めを心にちゃんと刻み付けておくがよい。——自分の考えをめつたに口外せぬこと、また、突飛な考えを実行するもんじゃやない。うちとけるのはよいが、決してなれなくするなよ。良いと思つた友だちが出来たら、鋼のたがでしつかり心へ巻付けておけ。だが、まだ卵からかえつたばかりのひよつこのような仲間のだれかれと手を握つて、掌が馬鹿になつてしまつてはいかぬぞよ。けんかにはいるなよ。だが、はいつた上は、相手がお前を警戒するようになるまでやつてのける。だれの言葉にも耳を貸すのはよいが、いろんな人に口をきくものじゃやない。みんなの意見は聞いて、自分の判断はひかえなさい。財布の許す限り身装には金目をかけていい。しかし、派手や気障に金をかけるものじゃやない。華美を避け、質の良い物を着なさい。服装で人柄が分るからな。フランスの上流の人たちは、この道のあか抜けした、生れながらのくろうとだよ。それから、金の貸手にも借手にもなるなよ。金を貸すと、金も友だちもなくしてしまう。金を借りると、儉約の心が鈍くなる。最後に何よりも大事なことは、己れに忠実であれということ、すれば、自然、夜が昼に続くように間違ひなく、だれにも不忠実にはなれないものだ。では、機嫌よう——願わくばこの戒めが、お前の心に深くしみ込むよう神に祈ります」と言う。（本文）

*

*

さて、今度は、父親（ポローニアス）から息子（レアティーズ）への、まさに「餞別の言葉」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……これから言つて聞かせる戒めを心にちゃんと刻み付けておくがよい。——自分の考えをめつたに口外せぬこと、また、突飛な考えを実行するもんじゃやない。うちとけるのはよいが、決してなれなくするなよ。良いと思つた友だちが出来たら、鋼のたがでしつかり心へ巻付けておけ。だが、まだ卵からかえつたばかりのひよつこのような仲間のだれかれと手を握つて、掌が馬鹿になつてしまつてはいかぬぞよ。けんかに入るなよ。だが、入つた上は、相手がお前を警戒するようになるまでやつてのける。だれの言葉にも耳を貸すのはよいが、いろんな人に口をきくものじゃやない。みんなの意見は聞いて、自分の判断はひかえなさい。財布の許す限り身装には金目をかけていい。しかし、派手や気障に金をかけるものじゃやない。華美を避け、質の良い物を着なさい。服装で人柄が分るからな。それから、金の貸手にも借手にもなるなよ。金を貸すと、金も友だちもなくしてしまう。金を借りると、儉約の心が鈍くなる。最後に何よりも大事なことは、己れに忠実であれということ、すれば、自然、夜が昼に続くように間違ひなく、だれにも不忠実にはなれないものだ」ということである。

これは、これで人生経験の豊かな父親からまだ世間をよく知らない若い息子への「立派な

忠告」になっているのであり、「……願わくばこの戒めが、お前の心に深くしみ込むよう神に祈ります」となるのである。

レアティーズは、「……では行って参ります」と言うと、ポローニアスは、「……万事好都合である。従僕どもも待っている」と言う。レアティーズは、「……オフィーリア、さよなら、ぼくの言ったことを忘れないでね」と言う。オフィーリアは、「……この胸の中に錠を下ろしてそのかぎは兄さんにお預けいたしますわ」と言う。レアティーズは、「……さよなら」と言い、レアティーズは退場する。——ポローニアスは、「……なんだい、兄さんがお前に言ったこととは？」と聞くと、オフィーリアは、「……あの、別に、それは、ハムレット様のことでございます」と言うのであった。

すると、ポローニアスは、「……いかにも、いかにも、いい事に気がついた。王子が近頃よく、お前の所へお忍びで、お前の方も、えろう気前よくお迎えして、お相手になっていそうだな。じつは、用心の為にわしに告げてくれた人があるのじゃが、もしその通りなら、お前に言って聞かせにやらぬことがある。お前はわしの娘として、また処女として、心得ねばならぬことをはっきりわきまえて居りませぬぞ。二人の仲はどうなのか？ さあ、何もかも打ち明けなさい」と言う。

すると、オフィーリアは、「……あの方はね、おとう様、近頃おやさしいお氣持をいろいろわたしに言っして下さいますのよ」と言う。ポローニアスは、「……なに、おやさしいお氣持、たわけたことを！ こういう危ない目にまだ出遇うたことのない生ぶな娘らしい口をききおる。一体、お前はそのおやさしいお氣持とやらを、そのまま信じているのか？」と聞く。オフィーリアは、「……おとう様、わたしには分からないのでございます」と言う。すると、ポローニアスは、「……よしよし、教えてやる。お前はな、まだ赤ん坊だと心得なさい、にせ金同様な、そのおやさしい贈物とやらを、ほんものの貨幣と思ひ込むなんて。自分というものを、もつと高く考えなさい。でないと、わしは阿呆の業ざらしとなるよ」と言う。オフィーリアは、「……おとう様、あの方は立派な氣持でわたしに言い寄りなさいましたのです」と言うと、ポローニアスは、「……たわけたことを。一時の氣まぐれだろうさ」と言う。オフィーリアは、「……うそいつわりは無いと、あらゆる神聖な誓いを立てて、おっしゃいました」と言うのである。

ポローニアスは、「……そりや、むく鳥を引つけるわなだわい。わしも身に覚えがある、血が燃え立つ時は、心も出たらめに、いろんな誓いを口に言わせるものさ。娘や、この誓いという、ぱつと燃え立つほのおはな、光るほど熱は無うて、文句を並べているうちにさえ、光も熱もさめてしまう、こんなものを火だと思っつてはいかんよ。これからは、処女の身として出しゃばらず、少しつつましやかにするがよい。御命令ならば談判に応じますというのでなく、もつと高くかまえて面会を許して上げるくらいに思つたらよい。ハムレット王子はまだお年も若い上に、お前などより、もつと自由に振舞える御身分柄ということを、しつかり腹に入れて、おっしゃることをいい加減に信じてお置き。早い話が、王子の誓いなんか信じなざるなよ。ありや、着飾った表の色と裏とは大違い、人をだますために聖者ぶって、口には殊勝なことを唱えながら、じつはけがらわしい要求をねだる、不義の取持役だよ。くどくは言わぬ、これだけはよく聞きなさい。ざつくばらんに言えばだな、今後は、みだりに、ちよつとでも、ハムレット王子に言葉をかけたり、語ろうては

相成らぬぞよ。よいか、きつと申渡して置くぞよ。さあ、さあ、お出で」と言う。オフィーリアは、「……おとう様の仰せ通りに致します」と言うのであった。(兩人退場)(本文)

*

*

さて、今度は、父親(ポローニウス)が娘(オフィーリア)に王子ハムレットとの関わり方について延々と喋って聞かせている場面であるが、それは、次のようなものである。まず、父親(ポローニウス)は、「……王子が近頃よく、お前の所へお忍びで、お前の方も、えろろ気前よくお迎えして、お相手になっていくそうだな。じつは、用心の為にわたしに告げてくれた人があるのじゃが、もしその通りなら、お前に言ってお知らせにやならぬことがある。お前はわしの娘として、また処女として、心得ねばならぬことをはっきりわきまえて居りませぬぞ。二人の仲はどうなのか？ さあ、何もかも打ち明けなさい」と言う。と、娘のオフィーリアは、「……あの方はね、おとう様、近頃おやさしいお気持をいろいろわたしに言ってお下さいますのよ」と言う。すると、ポローニウスは、「……なに、おやさしいお気持、たわけたことを！ こういう危ない目にまだ出遇うたことのない生ぶな娘らしい口をききおる。一体、お前はそのおやさしいお気持とやらを、そのまま信じているのか？」と聞くと、オフィーリアは、「……おとう様、わたしには分からないのでございます」と言う。すると、ポローニウスは、「……よしよし、教えてやる。お前はな、まだ赤ん坊だと心得なさい、にせ金同様な、そのおやさしい贈物とやらを、ほんものの貨幣と思ひ込むなんて。自分というものを、もつと高く考えなさい。でないと、わしは阿呆の業ざらしとなるよ」と言う。オフィーリアは、「……おとう様、あの方は立派な気持でわたしに言い寄りましたのです」と言うと、ポローニウスは、「……たわけたことを。一時の気まぐれだろうさ」と言う。オフィーリアは、「……うそいつわりは無いと、あらゆる神聖な誓いを立てて、おっしゃいました」と言うのである。

すると、ポローニウスは、「……そりゃ、むく鳥を引つかけるわなだわい。わしも身に覚えがある、血が燃え立つ時は、心も出たらめに、いろんな誓いを口に言わせるものさ。娘や、この誓いという、ぱつと燃え立つほのおはな、光るほど熱は無うて、文句を並べているうちにさえ、光も熱もさめてしまふ、こんなものを火だと思つてはいかんよ。これからは、処女の身として出しゃばらず、少しつつましやかにするがよい。御命令ならば談判に応じますというのでなく、もつと高くかまえて面会を許して上げるくらいに思つたらよい。ハムレット王子はまだお年も若い上に、お前などより、もつと自由に振舞える御身分柄ということを、しっかりと腹に入れて、おっしゃることをいい加減に信じてお置き。早い話が、王子の誓いなんか信じなざるなよ。ありや、着飾った表の色と裏とは大違い、人をだますために聖者ぶつて、口には殊勝なことを唱えながら、じつはけがらわしい要求をねだる、不義の取持役だよ。くどくは言わぬ、これだけはよく聞きなさい。ざつくばらんに言えばだ、今後は、みだりに、ちよつとでも、ハムレット王子に言葉をかけたり、語らうては相成らぬぞよ。よいか、きつと申渡して置くぞよ。さあ、さあ、お出で」と言う。オフィーリアは、「……おとう様の仰せ通りに致します」と言うのであった。

さて、兄(レアティーズ)も父親(ポローニウス)も、王子(ハムレット)と娘(オフィーリア)との「恋愛」に関しては、はっきりと賛成しかねる意志を表明している。その理由としては、まず、何と喋っても、一国の王子とでは余りにも「身分」が違い過ぎるということであり、それは、一体、何を意味するのかと問えば、……例えば、ある国の王子

と他の国の王女とが、いわゆる「政略結婚」をするというようなことは、いつの時代のどこの国でも当たり前のものであり、好きだから結婚をするというような自由な身分ではないのである。また、絶対的な権威を持つ父親から誰々と結婚しなさいと言われれば、いやでもその娘はそれに従うしかないのであり、その父親に真つ向から逆らえば、その娘はとも生きてはいけないのである。――ただ、王子（ハムレット）と娘（オフィリア）との結婚は、もしハムレットの先王（父親）の「敵討ち」（復讐）を果たすという思いや行、為などがなかったならば、あるいは可能だったかも知れない。というのも、国王も王妃も王子（ハムレット）と内大臣（ポローニウス）の娘（オフィリア）との関係について、それに強く反対するような言動は一つもなく、むしろ、はっきりと好意的に見ているからである。

*

*（第一幕第三場・終了）

第四場
城の城壁の上

第四場 城の城壁の上

ハムレット、ホレーシオおよびマーセラス、一方の小塔から登場。

ハムレットは、「……ひどくかみつくような冷たい空気だね。おお、寒い」と言うと、ホレーシオも、「……まったく、指がちぎれそうな、きつい寒さです」と言う。ハムレットは、「……何時頃かね？」と聞くと、ホレーシオは、「……まだ十二時にはなりませんまい」と言う。すると、マーセラスは、「……いや、十二時は打ちました」と言う。ホレーシオは、「……ほう、もうそんなか？ ぼくは聞かなかつた。では、そろそろ亡霊が例によつて出歩く頃だ」と言う。(本文)、——この場面は、寒々とした冬の「城壁の上」であり、そこに「三人」(ホレーシオとマーセラスそれにハムレット)がやって来る。そして、深夜十二時を過ぎたということで、そろそろ亡霊が例によつて出歩く頃になる。

奥にてラッパの吹奏、大砲の打ち上げられる物音がする。

まず、ホレーシオは、「……殿下、あれはなんの騒ぎですか？」と聞くと、ハムレットは、「……今夜は国王が徹夜で大杯の乾杯を重ね通し、此頃流行の乱痴気さわぎに興じているのさ。そして、国王がラインの酒をのどへ流し込むたびに、ラッパや釜形太鼓が万歳をはやし立てているのだ」と言う。ホレーシオは、「……そういう習慣なのですか？」と聞くので、ハムレットは、「……いかにも、習慣さ。ぼくはこの国に生まれ、この風俗には慣らされているが、こいつは守るより破った方が名誉な習慣だ。あのように馬鹿酒をやるから、この国民が東西の外国人からとがめられ非難され、酔っ払いだの、豚だのとの汚名を着せられるのさ。せっかく、われわれが功名手柄を立てて国威を輝かしても、その名誉を骨抜きにしてしまうのさ。個人の場合にもよくあるが、なんか生れつきの傷があつて、例えば、生れた時から——そりゃ、生れる者は自分の誕生を勝手に選ぶわけには行かないから、当人の罪ではないが——何か一いろの氣質が勝ち過ぎて、それがだんだんこうじて、理性を踏み外すとか、または、一癖あつて、それが好ましい風俗をあまりにも破るような時には、その個人が自然の戯れか星の悪いせい、そういう一つの傷を背負い込んでいる限り、ほかにどんなに純粹で限りなく貴い美德があるうとも、それは、その特別な傷に禍されて、世間の目には腐つたものに見えてしまうのだ」と言う。(本文)

*

*

まず、ホレーシオは、「……殿下、あれはなんの騒ぎですか？」と聞くと、ハムレットは、「……今夜は国王が徹夜で大杯の乾杯を重ね通し、此頃流行の乱痴気さわぎに興じているのさ」と言う。すると、ホレーシオは、「……そういう習慣なのですか？」と聞くので、ハムレットは、「……いかにも、習慣さ。ぼくはこの国に生まれ、この風俗には慣らされているが、こいつは守るより破った方が名誉な習慣だ」と言う。——これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと言え、それは、次のようなことである。まず、ホレーシオという人物は、そもそもデンマーク人なのか？ それとも、それ以外の外国人なのか？ この問題は、第五幕第二場で、ホレーシオは、死にかかっているハムレットの後を追つて、自分も毒を盛った杯(酒)を飲んで死のうとするが、その時の「台詞」が、「……

「わたしは、デンマーク人であるよりも、古代のローマ人でありたい」と、はつきりと言っているので、普通に考えれば、ハムレットの親友（ホレーシオ）という人物は、まさに「デンマーク人」ということになるかと思うが、ただ、ホレーシオは、どちらかと言えば、あまり酒も飲まないまじめな学者タイプの人であり、それゆえ、王室のことにも世間のことにもどこか疎いところがあるという設定なのかも知れない。

それはともかく、デンマークには、あのような馬鹿酒を飲んで乱痴気さわぎに興じる習慣があり、その「習慣」のために、「……この国民が東西の外国人からとがめられ非難され、酔っ払いだの、豚だのとの汚名を着せられるのさ。せつかく、われわれが功名手柄を立てて国威を輝かしても、その名譽を骨抜きにしてしまうのさ」と言うのである。それは、個人の場合でも同じであり、例えば、「……何かいろいろの氣質が勝ち過ぎて、それがだんだんこうじて、理性を踏み外すとか、または、一癖あって、それが好ましい風俗をあまりにも破るような時には、そのような一つの傷を背負い込んでいる限り、ほかにどんなに純粹で限りなく貴い美德があるうとも、それは、その特別な傷に禍されて、世間の目には腐ったものに見えてしまうのだ」と言うのである。——例えば、余りにも「酒癖が悪過る、女癖が酷過る、賭事狂い、金に汚い、金遣いが酷い、高慢ちき、性格が酷過る、暴力を振う、極端に偏屈、言葉遣いが酷い、人を人とも思わない、トラブルメーカー、その他」、そのような「性格や性質」などが余りにも勝ち過ぎると、ほかにどんなに純粹で限りなく貴い美德があるうとも、それは、その特別な傷に禍されて、世間の目には腐ったものに見えてしまうのである。

亡霊現る

ホレーシオは、「……殿下！ ご覧なさい、出ました！」と言う。すると、ハムレットは、「……おお！ もろもろの天使たちよ、われわれを守り給え！ さても、なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！ 天の靈気か、地獄の毒気か？ 目的が悪意であれ親切であれ、物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにもの問うて見る。われ、なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ぼうぞ。さあ答えよ。不可解に悩むおれの心を破産させないで、さあ知らせてくれ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破って出たのか？ 何故あって、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？ しかばねとなつたなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、かような陰に籠る夜を、更に物凄う訪れ現れるは如何なる故か？ 自然にもてあそばれてるわれわれの理性をもつては解き難い、このような恐ろしいなぞに、心をかき乱されるとは何故だ？ どういうわけだ？ 言え！ われわれはどうしたらよいのか？」と問う。（本文）

*

*

さて、この場面は、先王の「亡霊」の出現により、ハムレットとその先王の「亡霊」とが直接に対峙する、まさに一つの「クライマックス」場面であるが、その最初の「せりふ」は、次のようなものである。それは、「……おお！ もろもろの天使たちよ、われわれを守り給え！ さても、なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！ 天の靈気か、地獄の毒気か？ 目的が悪意であれ親切であれ、物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにもの

問うて見る。われ、なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ばうぞ。さあ答えよ。不可解に悩むおれの心を破産させないで、さあ知らせてくれ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破って出たのか？ 何故あつて、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？ しかばねとなったなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、かような陰に籠る夜を、更に物凄う訪れ現れるは如何なる故か？ 自然にもてあそばれてるわれわれの理性をもつては解き難い、このような恐ろしいなぞに、心をかき乱されるとは何故だ？ どういうわけだ？ 言え！ われわれはどうしたらよいのか？」と叫ぶのであつた。……では、その一つ一つを考えてみたいと思う。

まず、「……おお！ もろもろの天使たちよ、われわれを守り給え！」と叫んでいる。これは、何か霊的な不可思議なものや、途轍もない緊急事態に直面したような時には誰でも、例えば、亡霊（幽霊）などをはじめ、飛行機がまさに墜落していくような時、海で暴風雨に遭遇して船がまさに転覆しそうな時、また、超巨大地震やハリケーン或いは大津波などで今まさに身の危険を直に感じている時には、誰でも、「……おお、神よ、われわれを（われを）守り給え！」と、叫ばずにはいれない心境になるだろう。次に、「……なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！ 天の靈気か、地獄の毒気か？ 目的が悪意であれ親切であれ」と叫んでいる。——これは、出現した「亡霊」がどういう「霊」なのかよく分からないので、まず、「天の善魂」（天から舞い下りた「善い霊」）なのか、それとも、「地獄の悪魂」（地獄から抜け出た「悪い霊」）なのか、また、「天の靈気」（天の澄んだ靈気）なのか、それとも、「地獄の毒気」（地獄の腐った毒気）なのか、また、その目的は、「悪意」のための出現なのか、それとも、「親切」のための出現なのか、そのどちらなのかと、まず、先王の「亡霊」にそう問いかけているのである。

そして、「……物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにもの問うて見る」ということで、ハムレットは、「……われ、なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ぼうぞ」とある。——これは、先王の名前もハムレット（王）であり、それゆえ、「……なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ぼうぞ」となるのであり、そして、「……さあ答えよ。不可解に悩むおれの心を破産させないで、さあ知らせてくれ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破って出たのか？ 何故あつて、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？ しかばねとなったなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、かような陰に籠る夜を、更に物凄う訪れ現れるは如何なる故か？ 自然にもてあそばれてるわれわれの理性をもつては解き難い、このような恐ろしいなぞに、心をかき乱されるとは何故だ？ どういうわけだ？ 言え！ われわれはどうしたらよいのか？」と叫ぶのである。——つまり、一度、死んだ人間が、丁重に埋葬されたはずなのに、その墓石から抜け出て、深夜、なぜ、甲冑姿の「亡霊」となつて再び出現するのか？ その「理由」を聞かせてくれ！ と真剣に叫んでいるのである。

すると、亡霊、ハムレットを手招きする。

ホレーシオは、「……あなたについて来いと手招いています。何事かあなただけに打ち

明けたいことでもあるかのようです」と言うと、マーセラスも、「……あんなに丁寧な手つきで、もつと離れた別な処へ殿下を手招いています。しかし、ついてお出でになりますな」と言う、ホレーシオも、「……断然、それは相成りません」と言う。ハムレットは、「……物を言おうとしない。よし、おれはついて行く」と言うと、ホレーシオは、「……殿下、およしなさい」と言う。ハムレットは、「……どうしてだ？ 一体、何がこわいのだ？ ぼくは命なんか一本の針ほどにも思っていないよ。ぼくの魂は、あれと同様に不死身だもの、（そのぼくに）何をなしえようぞ。ほら、しきりに手招く。ついて行こう」と言う。ホレーシオは、「……でも、あれが殿下を河へでも、また、荒海へ突出た恐ろしい絶壁の上へおびき寄せて、そこで悪鬼夜叉の姿にでも変化して、あなたの理性の力を奪い気を狂わせたらどうなさいますか？ 考えても御覧なさい。ああいう場所そのものが、ほかに誘惑がなくても、千尋の底に海を見下ろし、また、波のとどろく音を聞くだけでも、ややもすれば飛び込んで見たい妙な気持を起こせるものです」と言う。

ハムレットは、「……まだ招いている。さあ、どこへでも行け、ついて行けど」と言うと、マーセラスは、「……殿下、お出でになつてはいけません」と言い、ハムレットは、「……えい、手を放せ」と言う。ホレーシオは、「……言うことをお聞き下さい。行つてはなりません」と言うと、ハムレットは、「……おれの運命が呼んでいるのだ。この体内の血管は力に満ちあふれ、かのニミアの獅子の筋骨のように張りつめている。まだおれを招いている。みんな、手を放せ！（彼らを振切つて、剣を抜く）。邪魔をする奴は、容赦なく亡霊にするぞ！ えい、どけ！ さ、行け、行け、ついていくぞ」と叫ぶのであった。

亡霊、一方の小塔へ入る。ハムレットが続く。

ホレーシオは、「……殿下は妄想に取り憑かれ、気が違ったようだ」と言うと、マーセラスは、「……われわれも後をついて行こう。このまま御命令に従っているわけには行かぬ」と言う。すると、ホレーシオも、「……そうだ、ついて行こう。この先、一体、どうなるのだろうか？」と言うので、マーセラスは、「……何かが腐っている。このデンマークの国では……」と言う。ホレーシオは、「……結局、神様が導き給うでしょう」と言うと、マーセラスも、「……ともかく、われわれは、後をついて行きましょう」と言うのであった。（本文）

*

*

さて、先王の「亡霊」が手招きをする。それを見て、ホレーシオは、「……あなたについて来いと手招いています。何事かあなただけに打ち明けたい、ことでもあるかのようですよ」と言うと、マーセラスも、「……あんなに丁寧な手つきで、もつと離れた別な処へ殿下を手招いています。しかし、ついてお出でになりますな」と言う、ホレーシオも、「……断然、それは相成りません」と言う。ハムレットは、「……物を言おうとしない。よし、おれはついて行く」と言うと、ホレーシオは、「……殿下、およしなさい」と言う。ハムレットは、「……どうしてだ？ 一体、何がこわいのだ？ ぼくは命なんか一本の針ほどにも思っていないよ。ぼくの魂（そのもの）は、本来、あれと同様に不死身だもの、（そのぼくに）何をなしえようぞ。ほら、しきりに手招く。ついて行こう」と言うと、ホレーシオは、「……でも、あれが殿下を河へでも、また、荒海へ突出た恐ろしい絶壁の上へおびき

寄せて、そこで悪鬼夜叉の姿にでも変化して、あなたの理性の力を奪い気を狂わせたらどうなさいますか？ 考えても御覧なさい。ああいう場所そのものが、ほかに誘惑がなくても、千尋の底に海を見下ろし、また、波のとどろく音を聞くだけでも、ややもすれば飛び込んで見たい妙な気持を起こさせるものです」と言うのである。

さて、先王の「亡霊」の「手招き」は、もちろん、ハムレットだけを呼び寄せ、そして、ハムレットだけに何か話したいことがあるからであるが、「……あんなに丁寧な手つきで」というのは、何が何でもついて来て欲しいという思いの表れであり、しかも、「もつと離れた別な処へ殿下を手招いています」というのは、すなわち、ほかの人がいるところでは話が出来ないからであり、それゆえ、誰もいない「二人だけになれる場所」へとしきりに手招いているのである。それを察したように、ハムレットも、「……ほら、しきりに手招く。ついて行こう」とするが、一方、ホレーシオとマーセラスは、それに強く反対をするのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、出現した「亡霊」がどういう「霊」なのかよく分からないからであり、それは、「天の善魂」（天から舞い下りた「善い霊」）なのか、それとも、「地獄の悪魂」（地獄から抜け出た「悪い霊」）なのか、また、その目的は、「悪意」のための出現なのか、それとも、「親切」のための出現なのか、そのどちらなのかよく分からないからであり、ホレーシオも、「……でも、あれが殿下を河へでも、また、荒海へ突出た恐ろしい絶壁の上へおびき寄せて、そこで悪鬼夜叉の姿にでも変化して、あなたの理性の力を奪い気を狂わせたらどうなさいますか？」と言うように、もし「地獄の悪魂」（地獄から抜け出た「悪い霊」）であり、しかも、その目的が「悪意」のための出現だとしたらと、まさにハムレットの「身の危険」を心配しているのである。

ところで、マーセラスが、「……何かが腐っている、このデンマークの国では……」というような「せりふ」を言う場面があるが、それは、先王を密かに「毒殺」して、その「王位と生命と王妃」を奪い取った大罪人が、何と「現国王」となって国を統治している。その恐るべき「事実」を、まさに「ハムレット」だけに知らせるためにこそ、今、まさに「亡霊」となって出現して、誰もいない「二人だけになれる場所」へとしきりに手招いて、そこで先王以外「誰も知らない事実（真実）」を語ろうとしているのである。

*

*（第一幕第四場・終了）

第五場 城壁の下の空地

第五場 城壁の下の空地

城壁の下の空地、城壁の戸口が開き、亡霊が現れる。

ハムレット、刀身と柄で十字形をつくりあとに続く。

ハムレットは、「……おい、どこへおれを連れて行くつもりか？ もうこれ以上、ついて行かないぞ」と言うと、亡霊は、「……（振り返って）よく聞け」と言う。ハムレットは、「……うむ、聞こう」と答える。ここから「ハムレット」と「亡霊」のお互いの「会話」が交互になされるが、まず、亡霊は、「……すでに時刻は迫って、再び硫黄燃える焦熱地獄の呵責へもどらねばならない」と言うと、ハムレットは、「……あわれ、気の毒な亡霊！」と言う。亡霊は、「……わしを不びんがらずともよい。ただ、わしが話すことをよく耳をすまして聞けよ」と言う。ハムレットは、「……さあ話せ、聞かずにいられようか」と言うと、亡霊は、「……聞いたら敵を討つことを怠るまいぞ」と言う。ハムレットは、「……何んぞ？」と驚くが、「亡霊」は、やがて、次のように語るのである。……

それは、「……われこそはなんじの父の霊なるぞ。夜のある時刻だけ迷い出て、昼間は地獄の業火の中に縛られて餓鬼道の呵責をなめ、在りし世の罪業の清められるを待つ身の上。われに地獄の秘密を語る自由さえあらば、そのただ一言を聞いただけで魂は苦しみ、若い血潮は氷り、二つの眼の玉は流れ星のように孔から飛び出し、からみ合った髪の毛は解けほぐれて、やまあらしの針毛のように一本一本逆立つような、恐ろしい話を聞かそうものを。しかし、この地獄の世界のことは生身の人間の耳にすべきではない。では、聞け、聞け、よく聞け。なんじ、もし、父を愛したことあらば——」と言う。

ハムレットは、「……さては？」と言い、亡霊は、「……父が無残にも非道にも殺害されたそのあだを討ち果せよ」と言う。すると、ハムレットは、「……殺害とな！」と驚く。亡霊は、「……殺害は如何にひいき目に見ても、道にそむいた悪じや。だが、これこそは最も暴虐非道の、ただならぬ殺害じや」と言う。ハムレットは、「……早く、早く聞かせて下さい。恋人たちが思いをはせるよりも早い翼を駆って、復讐へと飛び立ちますから」と言う。亡霊は、「……それは頼もしい心がけじや。もしお前が復讐の拳に奮い立とうとしないようなら、物忘れ川の岸にのびのびと根を下ろして、馬鹿太りする雑草よりも、よっぽど鈍いわい。さて、ハムレット、よく聞けよ。……わしは庭で昼寝の際、へびにかみ殺されたと発表され、デンマークの国民の耳も、このような虚言ですっかりだまされているが、じつは、お前の父をかみ殺したへびは、現に今、父の王冠を頂いているのだぞ」と言う。ハムレットは、「……やつぱり、虫の知らせが当たっていたか！ 叔父めが！」と言う。亡霊は、「……そうだ。あの畜生にも劣つた不倫の不義の男が、奸智と反逆の腕を振って——あれ程までに女を誘惑する魔力のある腕を振って——わしの貞淑に見えた妃の心を、奴の恥ずべき欲望へと折れさせてしまった。ああ、ハムレット、なんとこの墮落した寝返りだろう。わしの愛は結婚式の誓いからいささかもはずれたことがないほどに気高いものであったのに、そのわしから離れて、わしに比べて天性のあんなに劣っている奴へ心を移してしまうとは！ しかし、貞女はたとえ肉欲が天神の姿をして誘惑しても動かされないのに反して、みだらな女は輝やかしい天使と縁を結んでも、天上の契りに飽いて、ごみ溜をあさるものなのだ。が、待てよ、あたりの空気がもう夜明のようだ。手短かに話

そう。わしは午後のいつもの習いで、庭で寝ていた。その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、らい病のように肉を腐らすその液体をわしの耳の孔へ注ぎ込んだのだ。それには人間の血とは相容れない力があつて、体内の血管の中を水銀のように速くめぐつて、乳の中へ酸を落としたように、清い血を濁らせごらせるもの。わしの血もそのように働いた。そして忽ちわしの滑かな膚はらい病のように全身かさぶたにおおわれてしもうた。このように、わしは仮寝の間に、弟の手にかかつて、生命も王冠も妃も一時に奪い去られてしもうた。まだ聖餐式もすまわず、臨終の聖油も塗られず、死出の旅に赴く用意も無く、罪業の真盛りに命を刈り取られ、万の罪障を背負つたまま神のみ前に引出されさばかれる破目に落ちたのだ。ああ、デンマーク王の寝屋を肉欲破倫の床たらしめるなよ。さりながら、お前はいかにこの復讐に邁進すると、取り乱したり、母に害を加えようとたくらんではならぬぞよ。母のことは天に任しなさい。あれの胸のうちに宿る良心のいばらの針から呵責を受けさせなさい。さらば、もはや急ぎ別れを告げん。ほたるも光りを鈍らし始め、朝の間近かさを告げている。おお、さらば、さらばじゃ、ハムレット、わしのことを忘れるなよ」と言う。

* * *

さて、いよいよ先王の「亡霊」が、その恐るべき「死の真相」を自ら語るといふ、まさに一つの「クライマックス」場面であるが、それは、次のようなものである。――まず、ハムレットは、「……もうこれ以上、ついて行かないぞ」と言う、亡霊は、「……（振り返つて）よく聞け」と言う。これは、ここなら誰もいないので話をしてもよい場所に来たという判断からであり、そして、初めて、亡霊は、「（振り返つて）よく聞け」と言葉が発するのである。ハムレットは、「……うむ、聞こう」と素直に答えるが、それは、もちろん、そのためにこそついてきたからであるが、さらに、「……さあ話せ、聞かずにいられようか」と言うと、亡霊は、「……聞いたら敵を討つことを怠るまいぞ」と言う。ハムレットは、「……何んと？」と驚くが、それは、「……聞いたら敵を討つことを怠るまいぞ」と言うからには、何かよほど、「凶悪なこと」があつたに違いないという驚きである。

すると、亡霊は、「……われこそはなんじの父の霊なるぞ。夜のある時刻だけ迷い出て、昼間は地獄の業火の中に縛られて餓鬼道の呵責をなめ、在りし世の罪業の清められるを待つ身の上。われに地獄の秘密を語る自由さえあらば、そのただ一言を聞いただけで魂は苦しみ、若い血潮は氷り、二つの眼の玉は流れ星のように孔から飛び出し、からみ合った髪の毛は解けほぐれて、やまあらしの針毛のように一本一本逆立つような、恐ろしい話を聞かそうものを。しかし、この地獄の世界のことは生身の人間の耳にすべきではない。では、聞け、聞け、よく聞け。なんじ、もし、父を愛したことあらば――」と言う。

例えば、亡霊というのは、この世に未練があればこそ出るのであり、それゆえ、その思いを果たしてやらなければ、その「魂」はいつまでも「成仏」できず、この地上をさまよい続けて、あの世へと旅立つことが出来ないのであり、そのための「仇討ち」（或いは「敵討ち」）でもあるのである。それは、有名な「忠臣蔵」などでも同じことである。そして、仏教でもキリスト教でも、「葬式」というのは、死者の「魂」を懇ろに「弔い」、その死者の「魂」を清めて、「成仏」（この世に未練を残さず仏となるように）させてから、あの世へと送り込むという一つの「儀式」になるのである。

さて、先王の「亡霊」は、「……父が無残にも非道にも殺害されたそのあだを討ち果せ

よ」と言うのと、ハムレットは、「……殺害とな！」と驚く。亡霊は、「……殺害は如何にひいき目に見ても、道にそむいた悪じゃ。だが、これこそは最も暴虐非道の、ただならぬ殺害じゃ」と言う。——つまり、いろいろな「殺害」方法はあるが、自分が受けた「殺害」方法は、まさに「……これこそは最も暴虐非道のただならぬ殺害」であり、例えば、相手と戦って殺害されるならば、それは、自分の力不足で仕方がないとしても、また、目が覚めている時に、不意を突かれて殺害されるにしろ、それは、自分にも隙があったということにもなるが、今度の自分が受けた「殺害」方法は、まさに余りに卑劣極まりない「殺害」方法であり、それゆえ、どうしても「許せない」のであり、だからこそ、まさに「亡霊」となって出没しているのであり、「……父が無残にも非道にも殺害されたそのあだを討ち果せよ」となるのである。すると、ハムレットは、「……早く、早く聞かせて下さい。恋人たちが思いをはせるよりも早い翼を駆って、復讐へと飛び立ちますから」と言う。亡霊は、「……それは頼もしい心がけじゃ。もしお前が復讐の拳に奮い立とうとしないようなら、物忘れ川の岸にのびのびと根を下ろして、馬鹿太りする雑草よりも、よつほど鈍いわい。さて、ハムレット、よく聞けよ。……わしは庭で昼寝の際、へびにかみ殺されたと発表され、デンマークの全国民の耳も、このような虚言ですっかりだまされているが、じつは、お前の父をかみ殺したへびは、現に今、父の王冠を頂いているのだぞ」と言う。ハムレットは、「……やつぱり、虫の知らせが当たっていたか！ 叔父めが！」となる。

これは、先王の死後、二月も、ずっと「ハムレットの顔に曇がかかっている状態が続いていた」のも、それは、心から愛する先王の突然の死、それがまさに「腑に落ちない」からであり、何かおかしいという感じであり、また、「葬儀」から「婚儀」へが余りにも早過ぎるという感じ、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）には叔父（クローディアス）に対する様々な「疑念や不信」などが最初からはつきりとあったのであり、だからこそ、「……やつぱり、虫の知らせが当たっていたか！ 叔父めが！」となるのである。

すると、亡霊は、「……そうだ。あの畜生にも劣った不倫の不義の男が、奸智と反逆の腕を振って——あれ程までに女を誘惑する魔力のある腕を振って——わしの貞淑に見えた妃の心を、奴の恥ずべき欲望へと折れさせてしまった。ああ、ハムレット、なんという墮落した寝返りだろう。わしの愛は結婚式の誓いからいささかもはずれたことがないほどに気高いものであったのに、そのわしから離れて、わしに比べて天性のあんなに劣っている奴へ心を移してしまうとは！ しかし、貞女はたとえ肉欲が天神の姿をして誘惑しても動かされないのに反して、みだらな女は輝やかしい天使と縁を結んでも、天上の契りに飽いて、ごみ溜をあさるものなのだ」とある。——これは、実の弟（クローディアス）と王妃（ガートルード）の両方に対して激しい「怒り」をぶつけているのである。

そして、「……あたりの空気がもう夜明のようだ。手短かに話そう。わしは午後のいつもの習いで、庭で寝ていた。その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、らい病のように肉を腐らすその液体をわしの耳の孔へ注ぎ込んだのだ。それには人間の血とは相容れない力があって、体内の血管の中を水銀のように速くめぐって、乳の中へ酸を落としたように、清い血を濁らせこごらせるもの。わしの血もそのように働いた。そして忽ちわしの滑かな膚はらい病のように全身かさぶたにおおわれてしまった。このように、わしは仮寝の間に、弟の手にかかって、生命も王冠も妃も一時に奪い去られてしまうた」のである。——つまり、「……午後のいつもの習いで、庭で昼寝をし

ている時に、その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、わしの耳の孔へ注ぎ込んで、殺害されてしまった」のである。その結果として、「……わしは仮寝の間に、弟の手にかかって、生命も王冠も妃も一時に奪い去られてしまった」のである。だからこそ、その「敵」を「怨念」を晴らしてくれということである。

それに加えて、許せないのは、「……まだ聖餐式もすまさず、臨終の聖油も塗られず、死出の旅に赴く用意も無く、罪業の真盛りに命を刈り取られ、万の罪障を背負ったまま神のみ前に引出されさばかれる破目に落ちたのだ。ああ、デンマーク王の寝屋を肉欲破倫の床たらしめるなよ。さりながら、お前はいかにこの復讐に邁進するとも、取り乱したり、母に害を加えようとたくらんではならぬぞよ。母のことは天に任しなさい。あれの胸のうちに宿る良心のいばらの針から呵責を受けさせなさい」とある。——それでは、なぜ、王妃（ガートルード）には「害を加えようとたくらんではならぬ」となるのだろうか？

それは、もちろん、王妃（ガートルード）への愛情もあるだろうが、それに加えて、王妃（ガートルード）を実際に危害（殺害）すれば、それは、まさに実の「母親殺し」となり、一生ぬぐい去ることのでき得ない「罪を背負う」ことになるからである。

そして、亡霊は、「……さらば、もはや急ぎ別れを告げん。ほたるも光りを鈍らし始め、朝の間近かさを告げている。おお、さらば、さらばじゃ、ハムレット、わしのことを忘れるなよ」と言う。——この「わしのことを忘れるな」というのは、原文では、まさに「Remember me」であり、そして、あの有名な「パールハーバーを忘れるな」の「Remember Pearl Harbor」にも直結する表現になるのである。

亡霊大地の中へ消ゆ。ハムレット、ぼう然と打たれて、どっと膝をつく。

そして、ハムレットは、「……おお、もろもろの天使たちよ！ おお、大地よ、そのほかに何か？ 地獄にも呼びかけるか？ 馬鹿な！ 心よ、しっかりせい！ 筋肉も、にわかにもうろくしないで、しっかりおれを支えてくれい！（立ち上る）、『わしのことを忘れるなよ！』 哀れ不びんな亡霊よ、この乱れた頭の中に記憶力が座っている限り大丈夫。『わしのことを忘れるなよ！』 ようし、おれの記憶の手帳から、つまらぬ愚な書込みは一切抹殺してやる。書物から抜き書きした一切の金言名句も、若い頃、観察して写し置いた物の姿や過去の印象も一切ぬぐい消して、ただ父上の命令だけをおれの脳髓の手帳にいつまでも書留めて置くのだ。ほかのくだらないものごとっちゃにしないで。ようし、天に誓って！ それにつけても、なんとという浅ましい女か！ おお、悪人！ 悪人だ！ やさしい微笑を浮かべながら、罰当りの悪人だ！ おれの手帳（剣をさやに納む）——いくらやさしい微笑を浮かべても悪人たる者世に在り。少なくとも、デンマークにおいては確かにそれが在り得る（手帳に記す）——こう手帳に書留めて置けばよい。さあ、叔父め、お前のことを書いて置いたぞ。次は大事な文句だ。『さらば、さらばじゃ、わしのことを忘れるなよ』（膝まづき手を剣の柄に置く）もう誓ってしまった（祈る）」とある。（本文）

*

*

さて、この部分は、先王の「亡霊」の言葉が、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）に未だ「こだま」している状態であり、それゆえ、幾度も「わしのことを忘れるなよ」「Remember me」……という「言葉」が思い出されて来るとともに、「……いくらやさ

しい微笑を浮べても悪人たる者世に在り」というのは、表面的には笑顔（善人）を装いながらも、その実は、内面は悪人であるということであり、それは、国王（クローディアス）も王妃（ガートルード）も、その両方を指し示すとともに、忘れない為に、おれの脳髓の手帳にそれらを書き留めて置くということである。

ホレーシオとマーセラス、城から来て、暗がりの中にて叫ぶ。

ホレーシオは、「……殿下！ 殿下！」と叫び、マーセラスも、「……ハムレット王子様！」と叫ぶ。ホレーシオは、「……天よ、殿下を守らせ給え」と言うと、ハムレットは、「……そうじゃ、それがいい！（何事か決心して立ちあがる）」と、マーセラスは、「……ヒーロー、ホー、ホー、殿下！」と言う。ハムレットも、「……ヒーロー、ホー、ホー、来い、ここへ」と言う。（兩人、ハムレットを見る）。マーセラスは、「……殿下、お障り御座いませんか？」と言い、ホレーシオも、「……どうでした、殿下！」と言う。ハムレットは、「……ああ、驚くべきことだ」と言う。ホレーシオは、「……どうぞお聞かせ下さい」と言う。ハムレットは、「……相成らぬよ。ほかへ漏らすだろうから」と言う。ホレーシオは、「……私は誓って漏らしません」と言い、マーセラスも、「……私も漏らしません」と言う。ハムレットは、「……それなら、君たちどう思うかね、一体、人の心がこんなことを考えるだろうか？ だが、君たちは他言すまいね？」と言う。ホレーシオとマーセラスは、「……殿下、誓って他言は致しません」と言う。ハムレットは、「……デンマーク国中に住んでる悪人どもは、残らずみな大悪党なのだ」と言う。ホレーシオは、「……それしきのこと、亡霊が迷うて出る必要もありますまい」と言うと、ハムレットは、「……いかに、その通り、君の言うことはもつともだ。では、もう廻りくどい言い方はよして、お互いに手を握り合つて、別れる頃合じゃないかね。君たちだつてそれぞれ用事や、したいことをしなげりやなるまい。だれしも何かしらそれぞれ用事や、したいことがあるものだ。そして、しがない身のぼくは、これからお祈りでもしに行こう」と言う。ホレーシオは、「……これは途方もないざれ言」と言う。ハムレットは、「……気に障ったら御免、ぼくが悪かった、ほんとうに悪かった」と言う。ホレーシオは、「……とんでもない。気に障ったことなど御座いません」と言うのであった。（本文）

さて、王子（ハムレット）を追ってきたホレーシオとマーセラスは、夜明け前の暗がりの中で、「……殿下！ 殿下！」と叫ぶのであった。そして、ホレーシオが、「……天よ、殿下を守らせ給え」と言うと、ハムレットは、「……そうじゃ、それがいい！（何事か決心して立ちあがる）」とある。——さて、何を決心したかは分からないが、恐らく、先王の「亡霊」が言った内容は、誰にも（ホレーシオにも）話さない方がよいという決心ではないかと思う。そして、マーセラスが、「……ヒーロー、ホー、ホー、殿下！」と呼ぶと、ハムレットも、「……ヒーロー、ホー、ホー、来い、ここへ」と呼ぶ。この「……ヒーロー、ホー、ホー」というのは、鷹匠が「鷹」を呼ぶ、寄せる時のかけ声であるらしく、恐らく、（夜明け前の暗がりの中なので）、お互い「おーい」というような「呼び声」として使用していると共に、ハムレットは、相手の「言葉」に呼応（合わせて）いるのである。

そして、ホレーシオが、「……どうでした、殿下！」と聞くと、ハムレットは、「……

のか？ そんな所にいるのかい、正直小僧？ さあ、君たちも聞いたか、地の中で誓えと言っているぜ。さあさあ、君たちも誓え」と言う。ホレーシオは、「……殿下、誓いの文句をお示し下さい」と言う。ハムレットは、「……君たちが見たことを、夢にも他言しないと、この剣にかけて誓い給え」と言う。亡霊も、「……（下から叫ぶ）誓え」と言う。ハムレットは、「……よく言った、もぐらどの！ 馬鹿に早く地の下を掘って歩くじやないか？（二人は黙って二度目の誓いをする）。あつばれ、大した鉞夫ぶりだ！ もう一度、場所を変えてみよう」と言う。ホレーシオは、「……おお、これが不思議でなくて何が不思議だ！」と言うのであった。（本文）

*

*

まず、ハムレットは、「……今夜のまぼろし、あれは悪くない亡霊だった。それだけは君たちに知らせて置く。しかし、われわれの間で何があったかについては、定めて知りたかろうが、それだけは我慢してくれ」と言う。——つまり、先王の「亡霊」は、「悪くない亡霊」であり、それだけは君たちに知らせて置くが、それ以外の、「……われわれの間で何があったかについては、定めて知りたかろうが、それだけは我慢してくれ」ということである。そして、ハムレットは、君たちは僕の親友で学者で軍人であるならば、ぼくの一つの頼みを聞いてくれということだ、「……君たちが見たことを、夢にも他言しないと、この剣にかけて誓い給え」と言う。つまり、「……言葉だけではなく、剣にかけて」と言う。それでは、「言葉だけの誓い」と「剣にかけての誓い」とでは、一体、何がどう違うのかと問えば、それは、「言葉だけの誓い」の場合は、その「誓いを破った」時には、相手から様々な「批判や非難」などを浴びるだろうが、しかし、自分の「生命」まで奪われることはない。一方、「剣にかけて誓う」場合は、その「誓いを破った」時には、その剣を以て自分の「生命」が奪われても仕方がないという「重み」があるのである。

さて、ホレーシオは、「……おお、これが不思議でなくて何が不思議だ！」と言う。それは、亡霊の、「……（下から叫ぶ）誓え」という現象であり、ハムレットは、「……だから、不思議の珍客だと思って、懇ろに歓迎してやり給え。ねえホレーシオ、この天地間には哲学では夢にも考えられないことが沢山あるんだよ。さあ、こんどはこちらへ来給え。ここでさつきと同様、神にかけて、次のことを誓ってくれ給え。それは、僕がどんな不思議な妙な行動をしても——多分これからは随分奇怪な振舞をせざるまいと思うが——そんな場合に、決して、このように腕を組んだり、頭を振ったり、または、なぞめいた文句を、例えば、『ふむ、これには訳がある』とか、『話そうと思えば話せないことはないが』とか、『口に出して言おうと思えば』とか、『口止めされてなければ、訳を話せる人もいるんだ』などと、あいまいなことを言っていて、ぼくの秘密を何か知っていそうな素振を見せてはいけない。さ、そういうことを決してしないと、誓ってくれ給え」と言う。亡霊は、「……（下から叫ぶ）誓え」と。

ハムレットは、「……ほう、いらだって御座るな亡霊殿、鎮まれ、鎮まれ、（二人は三度目の誓いをする）。では、諸君、ぼくは真心をもって君たちの行為に報いるつもりだ。そして、このような男でも、友愛を示す為になすことは、神明の助けによつて、事欠かさないつもりだ……。さあ、一緒に出掛けよう。くだいようだが、どうか、いつも口には指を当てて、気をつけていてくれ給え。——世の中は関節（箍）が外れてしまったのだ。

ああ、なんとという因果か！ おれがそれを直す役割りに生れて来たなんて！ ——いや、なに、さあ一緒に「行こう」と言う。——一同、城内に入る。（本文）（第一幕終了）

*

*

さて、ハムレットは、「……だから、不思議の珍客だと思って、懇ろに歓迎してやり給え。ねえホレーシオ、この天地間には哲学では夢にも考えられないことが沢山あるんだよ。さあ、こんどはこちらへ来給え。ここでさつきと同様、神にかけて、次のことを誓ってくれ給え。それは、僕がどんな不思議な行動をしても——多分これからは随分奇怪な振舞をせざるまいと思うが——そんな場合に、決して、このように腕を組んだり、頭を振ったり、または、なぞめいた文句を、例えば、『ふむ、これには訳がある』とか、『話そうと思えば話せないことはないが』とか、『口に出して言おうと思えば』とか、『口止めされてなければ、訳を話せる人もいるんだ』などと、あいまいなことを言って、ぼくの秘密を何か知っていそうな素振を見せてはいけない。さ、そういうことを決してしないと、誓ってくれ給え」と言うのであった。

つまり、「三度の誓い」をすることになるが、一回目は、「言葉」だけで、「……今夜君たちが見たことを、夢にも世間に知らさないこと」を誓い、二度目は、「剣にかけて」、「……君たちが見たことを、夢にも他言しないと、この剣にかけて、誓い給え」となり、そして、三度目は、「……多分これからは随分奇怪な振舞をせざるまいと思うが、ぼくの秘密を何か知っていそうな素振を見せてはいけない。さ、そういうことを決してしないと、誓ってくれ給え」ということである。そして、この「……多分これからは随分奇怪な振舞をせざるまい」ということが、まさにハムレットが「狂気を装う」という事になって行くのである。しかも、「……世の中は関節（箍）が外れてしまったのだ。ああ、なんという因果か！ おれがそれを直す役割りに生れて来たなんて！」となるが、——それは、現国王（クローディアス）の卑劣きわまりない「悪事」（毒殺）を白日の下に暴くとともに、無念のうちに崩御された先王の「敵討ち」を行ない、その先王の「怨念」（恨み）を晴らすということでもあるのである。（第一幕第五場・終了）

*

*

（第二幕へと続く）

「参考文献」

※底本「ハムレット」市河三喜・松浦喜一訳（「岩波文庫」）